

1. 断れない縁談

ここは、エベルシア王国。国土南部にある大森林に、魔獣がうじやうじやと生息している大きな国だ。

——魔獣。それは狂暴で残忍で、己の腹を満たす事しか考えていない獣だ。そのくせやたらと同種で群れて、たまに大繁殖を起こす。鹿型に狼型、熊型に虎型——とにかく色んな形をしているが、総じてその肉体は膨大な魔力で満ちている。

死に絶えればその肉体から魔力が溢れ、大地へと広がるのだ。そうして魔力で潤った大地には魔草が繁り、魔法石の結晶化が進む。

そんな狂暴だが、益も生む魔獣。この国ではその魔獣の肉体から取れる素材や肉、それから大森林産の植物や鉱石を扱い、昔から交易で栄えていた。

よって我々は決して、他国と戦争をしない。

しかしそれにも関わらず、この国には遙か昔から、二つの騎士団と二つの魔術士団が存在している。

第一騎士団と第一魔術士団は国の治安維持に。

第二騎士団と第二魔術士団は魔獣の管理に。

それぞれの団員が国のため、日夜勤めているのだ。

そんな国で私、アナスタシアは騎士をしている。

所属は第二騎士団、第二部隊。

そう、魔獣を管理する方の騎士団である。

もう一度言うが『駆逐』ではなく『管理』なのだ。

放置しすぎても、減らしすぎても駄目。国で定められた『良い』とされている生息数を超えないように、管理をする。

そしてそのためには魔獣の生息数を把握する必要があるため、定

期的に大森林内を巡回する——そんな仕事だ。

そんなこんなで国直下の騎士ではあるものの、私達『第二』の騎士や魔術師はあまり城にはいない。

大森林を囲んだ高い塀の外にある、二階建ての基地。基本的にはそこで、待機をしているのだ。

仕事内容としては大森林内の見回りと、鍛練。それから大森林周辺の巡回。拘束時間こそ長いものの、基本的に暇だ。

魔獣を倒した際には各隊で肉や革、角等の素材を剥ぎ取るが——自然から採れる素材は、第一部隊のみが採集する。魔獣よりも管理が難しいため、ひとつの隊が専門として扱っているのだ。

よって決まった時間に決まった行動を取って、それからのんびりと自主トレーニングをしている内に一日が終わる。

しかし問題は、魔獣が高い塀を超えて脱出した時だ。

見上げるほど高い塀なのに、たまに軽々と超えてしまう個体が現れる。そうなるともう、生息数がどうとか言ってられない。

大森林は国土の南側にある。そしてそこから更に南に行ったところにあるのは、国境線だ。

魔獣が国境線を超えてしまうと、国際問題に発展しかねない。だから仕事中の私達は、魔獣脱走アラートが鳴れば例え何をしていたとしても、直ぐ様現場に駆けつけて対処をしなければならぬのだ。

そんな我が第二騎士団の部隊は全部で三つ。

各部隊が日勤、夜勤、非番と、決まったスパンで繰り返し、二十四時間体制で大森林で暮らす魔獣の動向を見張っている。

毎日移転陣を使って城にある宿舎に帰るが、仕事がある日はほぼ寝に帰るだけだ。

とにかく拘束時間が長いため、入団し配属されたばかりの新人は皆文句を言う。だが数年もすれば、ものの見事に慣れていく。

かく言う私も最初はなんだかなあと思っていたものの、勤続八年にもなれば何とも思わなくなった。

何より、二食昼寝付きの職場なのだ。案外悪くないものである。

——両親は相変わらず、結婚はまだなのかと急かしてくるけれど。

「アナスタシアです」

「うん、どうぞ」

人伝に呼び出された私は基地の四階から繋がる監視塔から、二階の隊長室までやって来ていた。

伝言を受けてから真っ直ぐやってきたのだ。

「失礼します」

許可が出たのでドアを開けて、足を踏み入れる。

姿勢を正して、堂々と。そう自分に言い聞かせて、私は少しだけ振り返って静かにドアを閉めた。

「……………」

広い執務室。高級そうな本棚を背にした執務机。その奥で上質なチェアに腰掛けているのは、長い金髪を緩く結んだ柔らかな顔立ちの男性だ。机に肘を突き指を組んでにつこりと笑い、正面から歩み寄る私を見ている。

名前はアストラ。我らが第二部隊の隊長様だ。

私は姿勢に気を付けながらしっかりと床を踏みつけて、彼の前に立った。敬礼も忘れない。

「お呼びと伺って馳せ参じました」

「うん」

隊長はゆっくりと前屈みだった体を倒し、背凭れに背中を預けて

長い足を組む。

それでも彼のにこやかな表情は変わらない。

けれど私の背筋には、タラリと冷たい汗が流れた。

敬礼をしたまま待てど暮らせど、彼は相槌を打ったまま喋らない。

私は固唾を飲んでその様子を見守るが、まるで話題が切り出される様子はなかった。

「……あの」

「うん？」

遂には痺れを切らして。ご用件は、と問いかけようとした声が喉につつかえる。魔獣の群に囲われようとも臆さない生粋の騎士である私の膝は、情けなくも震えてしまいそうだった。

「あのねえ」

「は、はい」

ふう、と溜め息を吐く声を聞いて、私は見事にブルツていた。
昔から全く老けない年齢不詳の上官様。

実はもう何百年も生きている不老不死である、実は魔力が多すぎて加齢が遅い、実は女を喰っては捨てて若さを奪っている、実はやんごとなき血が流れている、実は人ではない——などなど。とにかく色んな噂が絶えない人だ。

悩ましげな様子は大変美麗であるのだが、私は膝が震えないようにするだけでいっぱいいっぱいであつた。

脳裏に甦るのは新人時代の地獄の扱き上げ。

我が隊の新人はこの柔和な雰囲気にももの見事に騙され、隊長に舐め腐った態度を取ることが通例で——私もまた、そうだった。

しかしこちらの隊長様は、悪魔が尻尾を巻いて逃げ出すほどに鬼畜な御仁である。

もし今ブルツているのがバレたら、『根性がないねえ』と笑顔でのほほんと言われ、立てなくなるまで稽古をつけられることだろう。その上翌日は筋肉痛が酷くて動きが鈍り、『おや、運動不足かい？』と笑った隊長にまた稽古をつけられるのだ。

二十八歳にもなって汗と涙と土にまみれて惨めに這いつくばるのはごめん被りたい。

「僕でも断りづらい案件がきていてねえ。ほんと、困っちゃうよね」
「は、はあ……」

そうなのですか、と小さく呟いて俯きかけたが、隊長の目が薄く開きかけたので慌てて顔を上げる。

いつも笑みの形をとっていて見えない瞳の色は、煌めく翡翠色だ。しかしその目で見つめられた隊員は皆震え上がる。

何故なら『おう、ちよっと訓練場来いよ』の意味合いがあるから

だ。紛うことなき死刑宣告である。ゆるしてほしい。

「……まあ、そういうことでさ。アナスタシア、明後日お見合いしてきてよ」

「おみ——はいっ？」

全く予想外な話が振ってかかってきて、私は間抜けな声を上げた。しかし美麗な隊長様は口を開けてにっかりと笑い、小首を傾げる。「うん、了承してもらえてよかった。詳細は追って書面で渡すからよろしくね」

「えっ？あ、いえっ、その……っ！」

了承したわけではない。そう食ってかかろうとしたが、どうしたのかな？と笑顔で問いかけられる。

あざとく小首を傾げられてもときめかない。貴方のファンの方々と違って、私達隊員は貴方の中身を知っていますので。

「出口はそっちだよ？」

黒手袋をした手でサツ、と後ろのドアを指し示されて、私はブルツと震え上がった。

——それから私は、「はひっ！」と情けない声を上げて。隊長に薄目で見つめられながら、慌てて踵を返した。

それから暫くの間ビクビクとしていたものの、訓練を言い渡されることはなかった。

しかしよかったよかったと上機嫌で鍛練所に向かうと、何故だかそこには笑顔の隊長がいて。悲鳴を上げてしまった私は、彼から木刀を手渡される。

手合わせしようと誘われれば、断ることなど出来ない。

だから結局私は、鬼のように強い隊長様にボコボコに叩きのめされたのだった。

* * *

翌々日の昼過ぎ。私は眉を顰めながら、城の廊下を歩いていた。

何故かは分からないが、二日連続で隊長に鍛練をつけられたのだ。徹底的に肉体をいじめ抜かれ、今では全身が筋肉痛である。

歩いているだけであちこちが痛んで、常時顰めっ面だ。しかし目的地に辿り着いたら、どうにか表情を取り繕わなければならない。

本日は隊で私一人だけ、非番となっている。

そんな中で私は急にやってきた休日を喜ぶこともなく、心の中で隊長に文句を垂れていた。

（詳細って言うっても、ねえ……）

胃痛で腹を擦る副隊長に渡された書類には、日時と場所、お見合いをする旨しか書かれていなかった。

相手についての、一番重要な情報がなかったのだ。

もしかしたら隊長の故意かもしれないが——私はなんとなく、嫌な予感がしている。

服装は隊服でいいと言われたので、いつも通り黒の隊服を身に付けている、のだが——

となるとやっぱり、顔見知りか。

騎士団の誰かか、魔術士団の誰かか——

『第二』の所属ならば魔術師であつても、職場が同じなので皆知っている。しかし『第一』所属となると騎士も魔術師も知らない者の方が多い。

せめて難有じゃなければいいな——と思いながら。指定された客室の前に辿り着いたら私は、ドアを見上げた。

コンコンとノックをすれば、ドアは内側から開く。

「あ。第二騎士のアナスタシアです」

私は顔を出したメイドさんに、ペコリと会釈する。

すると彼女はお待ちしておりましたと応えてお辞儀を返してくれました。それから私に、入室を促す。

「……っ」

室内に足を踏み入れると、すぐに長椅子二脚とテーブルの応接セツトが目に入った。

手前の長椅子腰掛け、こちらに背を向けている御仁。その姿を目にした瞬間、私は嘘でしょ!?!と心の中で叫んだ。

「……ああ、来たか」

「……、……お疲れ様です」

いやいや、まさかな。なんて思いながら歩み寄ると、大きな手で向かいの席を指し示される。

私は筋肉痛と気まずさでギクシヤクとしながら、彼に大人しく従う。しかし困惑は拭えず、結局躊躇いながら着席することになった。彼が長椅子の右側の席に腰掛けているため、私はその正面ではなく、対角線の位置に座った。

メイドさんはドアの前で深く腰を折り、引き留める前もなく退室する。

ああ——二人きりに、なってしまった。

（この人も確か未婚のはずだけど、一年、いや二年？くらい前に、隊の増員がされてたはずだし！そこにも未婚の男性はいるはずだし、きつと違うよね！だって結婚とか恋愛とか興味無さそうだもん！独身貴族って感じ！）

なるべく動揺を表に出さないようにと気を付けていても、完全には隠せていなかったのだろう。

目の前でやたら長い足を組んで座る男性は、視線を左下に向けて微かに笑った。

やたら高い背丈とやたら厚い胸板のせいで、立派な皮張りのソファが小さく見える。

顔立ちとしては決して厳めしくはないのに、とにかく放たれる気迫が凄いのだ。

（なんなのなんなのもう！ 離れて座っていてもこんなに圧迫感があるなんておかしいでしょ!? もう、もう、帰りたい……!）

筋肉痛も辛いし。ハードな鍛練のせいで疲労が抜けていないのだ。しかし五月蠅い私の胸中に反して、室内は静まり返っている。

もちろん帰りたいですなんて言えない。自分好みに整えた寮の個室には、どんなに望んでも今は帰れないのだ。

鼓動までドクドクバクバクと五月蠅い。

背中や首筋、こめかみに至るまでダラダラと嫌な汗が流れ、私はグルグルと目を回していた。帰りたい。帰れない。

「互いに顔見知りだが、改めて自己紹介をしておく。俺はカウル。第二魔術士団、第三部隊の隊長だ」

「……存じ上げて、おります……」

そう、この遅しくて上背もある御仁は、騎士ではなく魔術師なのだ。でっかい銃を持ってガトリングのように魔力の弾丸をぶっぱなすのである。こんなにガタイが良いのに、肉弾戦はしないのだ。

細身に見えるのに鬼のように強いうちの隊長と、見た目だけで言えば完全に逆である。

（……あ。隊長のことを思い出したらなんか、落ち着いてきた……）
あのおっそろしい笑顔が脳裏に浮かび、私は正気を取り戻した。
まだ自己紹介を返していなかったと思い出し、慌てて口を開く。

「第二騎士団第二部隊所属、アナスタシアです」

「ああ、知っている。丁寧ありがとうございます」

「……はい」

悪い人ではないと思う。いいや寧ろ、善人なのだろう。

あまり関わりが無くとも部下に慕われているのは、遠目で見てい
るだけでも分かる。

（ただ……どうしても怖いんだよなあ）

何か嫌なことをされたわけではない。

それどころか気安く挨拶をしてくれたり、たまたま同じ場所にい
て気まずくないようにと話を振ってくれたこともある。

——だがこわい。

カウルさんは圧倒的な強者のようなオーラを身に纏っていて、全
体的に大きいからとにかく圧迫感がある。

きつと生き物としての本能的な恐怖だろうと自己分析をしているのだが、どうしても克服できないでいた。

「……薄々、勘づいてはいたのだが」

「は、はい」

大きな手で首を擦る彼もまた、国から支給されている隊服を着ている。上に着ているローブは置いておいて、隊服は私よりかなりサイズが大きいはずだ。

私が着れば、ズボンなどストンと落ちてしまうことだろう。

「君は……俺が、苦手だろう？」

「あつ、う……」

ドキリとして反射的に否定しようとすれば、大きな手がサツと前に出された。構わないと首まで横に振られてしまい、私は何も言えなくなってしまう。

「うちの初期メンバーがこぞって結婚し、上からの結婚しろという圧が強まって——そこでアストラからこの話が来たわけだが。どうして俺を苦手に思っている君なのだろうと、不思議に思っていてな」

「え、隊長が……？」

今、聞き捨てならないことを耳にした。

一昨日、隊長は何と言っていたか。私に何と言って、見合いをしてこいと言ったのか——今でもきちんと、覚えている。

「隊長から、この話を出したのですか……!?」

「え？ あ、ああ……」

私は床を踏み鳴らして立ち上がり、テーブルにダンと両手を突いた。そんな私に彼は黒い瞳を真ん丸にして、体を少し仰け反らせた。

「そろそろ本格的に見合いをセッティングされそうだとこぼしたら、『じゃあ僕がいい子を紹介してあげる♡』と……」

「……っっ！」

やっぱり、聞いていた話とちがう。隊長は、『断りづらい案件がきていてねえ』と言っていた。自分の意思ではないと言っていた。

それにアストラ隊長は、とてもよく隊員のことを見ている。

当然好物や苦手なものも把握済みだ。

あれでいて鞭だけではなく飴も使いこなす人で——というのは、今は置いておいて。私がこの人を苦手に思っているのなんて、お見通しであるはずなのに。

「……ッ!! いじ、わる……っ! うう、うそつき! ひどいつ! 信じられないっ」

「——……」

まんまと騙されて、全身筋肉痛で痛くて、疲れてて、目の前の人
が怖くて、家に帰りたいのに帰れない。

追い詰められた私はわあっと嘆いて、閉じた目の端からチヨビツと涙を滲ませた。

突然感情が爆発した私に驚いたのか、カウルさんが息を飲んだ気配があつた。しかし私は、彼に構ってられない。

色々なものと日頃の鬱憤が絢交ぜになって、心がぐちゃぐちゃだ。私は酷い酷いとグチグチ言いながら、長椅子に座り直す。

そうして右を向き、膝を曲げて長椅子の背凭れにぺったりと頬をくっつけた。

「その、大丈夫か……？」

「うう、全然大丈夫じゃないです……」

今私の脳裏には、両手でピースをする隊長の姿が浮かんでいる。あの人はいつも、自分が最善だと思う選択をする。

つまりはこれが、私にもカウルさんにも最善だと思つての行動な

のだろう。

なら二日連続の扱き上げも最善の選択だったということなのだろうか。こんなに痛くて辛いのに。

「うう、うう、恐怖を克服しろってことお……？」

「それはなかなかスパルタだな」

意外と近くから声がして、私はメソメソしながら左に視線を向けた。するとすぐ傍まで、カウルさんが近付いて来ていた。

腰を折って、上から私を見下ろしているのだ。

大きな体から私の上に、影が落ちている。

ヌツという効果音がピツタリと合いそうだ。

ビクツと体を跳ねさせた私は——何故だか反射的に噛みついた。

「カウルさん、おつきいです！」

「お、おお……。そうか、悪いな」

理不尽に叱られて謝りながらも、カウルさんはそこから退かない。
ムツとした私が涙目で睨み付ければ、何故だか彼の鋭い双眸がゆるりと垂れた。

「その、アストラは隊員に厳しいと聞いていたが……よく意地悪をされるのか？」

「厳しいなんてもんじゃありません！あの人には鬼です！」

「そ、そうか……。それは可哀想にな……」

そうです、可哀想そうなんです！と何度も頷けば、大きな手がそろりと私の左肩を撫でた。

触っていいなんて言っていない。

なんだその大きな手は……！

「なんですか、あっち行ってください！怒りますよ！」

「……………んん」

怒りますよと言いながら怒っているのに、離れるどころかトント
ンと背中を叩いてくる。

薄い唇はむず痒そうに動いているし、何を考えているのか本当に
分からない。

「もう、なんなのよーっ！もーっ」

「……………」

あっちの隊長はひどいし、こっちの隊長はよく分からないし。

一般ヒラ隊員を揉まないでくれと思いながら、私は凄まじい威圧
感を放つ苦手男性の前でホロツと涙を流した。

「なんだ、その——気持ちが悪落ち着かない時はハグが効くというだ
ろう？俺はこの通り体が大きい。すっぽりと包めて安心感が絶大だ」

「……………はあっ????」

何言ってるのこの人。と邪険に思っで見上げれば、彼の目元がほ

んのりと赤く色付いていると気付いた。

私に見つめられたまま、彼は左隣の空いたスペースに腰かける。

体重によって傾く座面。ジッ、と見つめてくる黒曜石のような瞳には、熱が籠っているような――

（あれ？もしかして私……変なスイッチ押しちゃった？）

カウルさんがこちらに向けて腕を広げ、待っている。

いやいや行かないですけど。と冷めた目を向けても、心なしか嬉しそうにしていた。

「私、貴方のことが苦手なんですが？」

「ああ。ショック療法だ」

物は言いようである。自信満々に頷かれて、私は脱力した。

何だかドツと疲れてしまった。

どうにも苦手で、仕事中や街で見かけても出来るだけ避けていた

人。そんな相手と密室に二人きりにさせられた上で、お見合いをしている。

とんでもない話だ。

断りたいのに、あの鬼上官はイエス以外を聞き入れないだろう。

私はハア、と大きく溜め息を吐いて、再び脱力した。

それからもういいや、どうとでもなれーと。彼に向けて体を倒す。

「……んっ」

すぐに絡み付いて来た腕で、左側からぎゅっと体を包み込まれて。軽々と体を持ち上げられたと思えば、膝の上に乗せられる。

正面から膝上にだっこをされて、右側に折り畳んだ足を流している形だ。

まるでちよつとした荷物を持ち上げるような手軽さだった。

ふんわりと鼻腔を擦る香りは、苦味と爽やかさが調和している。

「あの、ちよつと？」

「細かいことは気にするな」

全然細かいことじゃない。抱っこの許可など出していない。

ムツとして逃げようとするが、腰に回った腕は外れなかった。

「座り心地が悪い……」

「悪いな、我慢してくれ」

ガツチリとしていて硬い太股は、大変座り心地が悪い。

しかし包み込む体は逞しく、とてつもない安定感がある。

体から力を抜けばしっかりと支えてもらえて、何の心配もなく身を任せられるのだ。

身動いだところで拘束は緩まない。なので私は、諦めて身を任せることにした。

彼の胸板に額をくっつけければ、優しく包み込まれる。

顔のすぐ傍にある黒いローブから爽やかなシトラスの香りと、微かに苦みのある香りが漂って来ていた。

シトラスは香水だろうが、苦い香りの方は――

（魔煙草の香り？）

魔煙草――それは、独特の風味と香りでも好き嫌いが別れる、魔力回復用の煙草だ。嗜好品というよりは、医療品に分類される。

魔煙草は大森林に生えている魔草を原料にした、我が国の特産品。自分で吸ってみた時はハマらなかった香りが、彼の体臭と混ざって絶大な色気を放っている。

（なんかちよつと……これは、良くないかも……）

元々、カウルさんは大人の色気が凄い人だ。

そんな人と密着して、何だか私は変な気持ちになってきている。いけないと頭を振れば、太い腕で軽く腰を締め付けられる。

私より体温が高いのか、彼の体は熱いほどだった。

「……どうだ？ まだ、怖いか？」

「……っっ」

右耳のすぐ傍で、ビリビリするような低音が響く。ジワジワと服越しに体温が伝わって、二人の熱が混ざり合っていた。

急激に気恥ずかしくなった私は、静かに顔を俯ける。

「いえ、その」

不思議とこうして密着している分には、こわくは無い。

寧ろホツと安心するような、そんな気持ちになっていた。

離れていれば捕食者だと感じ、包まれていたら庇護者だと感じる。感性とは、不思議なものだ。

「そうか。ならもう暫くこうしていよう」

「……はい」

幸い、本心には気付かれなかったようだ。

私は秘かに安堵して、小さく息を吐いた。

（本当に、どうしてこんなことになったんだろう……）

今日だって本当は、基地で大森林の見張りをしているはずだった。いやそれどころか、森の中へ調査に出掛けていたかもしれない。それなのに突然非番になって、お見合いをして、苦手な人の膝上に居る。何がどうなればこんなことが起きるのだ。

「……流石はアストラといったところか」

「へ？」

遠い目をして考え込んでいると、そんな呟きが聞こえてきた。訝しんで見上げた先で、目尻が優しく垂れる。

「いや……俺の好みをよく分かっているな、と」

「好みい？……ですかあ？」

ナメた口をききかけて、遅れて取り繕う。

今更だとも思うが、上下社会で目上の方への礼儀は絶対だ。

——その目上の人の膝上に、しつかりちやつかりと座っているわけだが。

「——いやまさか俺も、こうも浮かれるとはな……。あの問題児達が落ち着くところに落ち着いて、思っていたよりも気が抜けていたのかもしれない」

「……、……」

え、浮かれてるの??と聞き返そうとして、賢い私は口を噤んだ。藪蛇は勘弁だ。自分で自分の首は絞めたくない。

「……ふう」

キュツと閉じていた口をもとに戻して、一息つく。

そうして私は、じつとりとした視線に居心地が悪いなあと思いな

がらも、思考を巡らせた。

（そういえばカウルさんの隊の初期メンバーの人達って、確かここ数年で結婚ラッシュになっていたはずよね）

『問題児達』とは、その三名のことだろう。

私も面識があるそのお三方の名前は、ドリーさん、ガスクさん、シェリルさんだ。シェリルさんのみ女性である。

そして魔術開発の天才であるガスクさんに至っては、現在では退職していた。

風の噂で聞いたが、今は下町で奥さんとパン屋を営んでいるとか。副隊長であるシェリルさんに関しては現在妊娠中で、今は産休に入っているらしい。

彼女の夫である第一の騎士、カイエン隊長殿がニコニコしながら出産の予定について話している場面に遭遇したことがある。

顔見知り程度なのでその時は話に参加はせず、はえーっと思いな
がら会釈をして通り過ぎたのだが。

（——まって。いや、まって。もしかして私、あの濃ーいメンバ
ーの輪に入るの？うそでしょ？？）

残り一人の初期メンバー、ドリーさんに至っては常識人な印象が
強いが、使える魔法が非凡だ。

この国に数人しかいない短距離移転魔法の使い手なのである。国
が絶対に手離さない人材だ。

そしてそんな彼だが、奥さんとなった人は大商会のご令嬢で——
大森林に彼女が来る度用もないのに姿を現していたのを、目撃して
いる。

仕事ではないため、移転陣は使えないだろうから。わざわざ、短
距離移転魔法を使つて。わざわざ、会いに来ていたのだ。

奥さんが妊娠、出産した現在では、めっきりそんな機会も減っているようだが。

（その人達の頭取と……私が、付き合う???）

いやいや待ってくれと。私は広い腕の中にすっぽりと埋まりながら、痛むこめかみを押さえた。

私は鬼上官に怯えながらも真面目に職務をこなす、一般騎士だ。長いものには巻かれる。ことなかれ主義。魔獣は屠っても上官には逆らうな。——そんな、ただの一般人なのだ。

『アナスタシアって、隠してるけどエムっけあるよねえ』とセクハラ紛いなことを言われたことがあるが、決してマゾではない。

そのせいで特に無理難題を言いつけられている気もするが——マゾでは、ないはずなのだ。

結婚するとしても、もったこう……普通な。こう……あまり、特

徴という特徴のない人が相手だとばかり、思っていた。

それなのにこんな、物語のラスボス級の相手が出てくるだなんて聞いていない。やめてほしい。

「ん。体温が上がっているな。暑いかな？」

「え、ええと……はい」

そうか。と少し残念そうに言って、カウルさんは私を長椅子の上に戻してくれた。

またしてもひよいと簡単に持ち上げられて、ストーンと置かれたのである。魔法職なのに、どうしてそんなにも筋力があるのか。甚だ疑問である。

「大分、怯えが減ったように見えるな」

「そう……ですかね」

離れたら離れたで、またしてもジリツと後退したいような心地に

なる。それに勘づかれたのか、彼の右手がそつと私の左手を取った。すっぽりと包み込まれた自分の手が、一瞬だけ子供の手のようにみえた。

「次の非番はいつか、教えてもらえるだろうか」
「えっ？つ、次ですか？」

驚いて顔を上げた私の視界に、真剣な表情を浮かべた整った顔立ちが飛び込む。

視界の暴力——と呆然としてみると、彼がそうだと頷いた。
いやあと言葉を濁すが、見逃してもらえそうにはない。

「あ、あのお……一度持ち帰らせていただきたくう……」
「……………」

然り気無く握られた手を引いてみるが、離れない。そのことに驚いて強めに引くと、何故だか反対の手も捕らわれてしまった。

両手ともガツチリと、大きな手で握り込まれている。

「あの、一度お、うちの隊長にも確認をしたくてえ……なので、えつと、また後日連絡をさせていただきますね……っ！」

やけくそでパアツと笑いかければ、カウルさんはキョトンと目を丸くした。そしてそのすぐ後に、ほんのりと口角を上げる。

何となく嬉そうなのが伝わって来て。私はかあっと体温を上げた。「分かった。ならば待っている」

「……は、はひい」

気恥ずかしさと照れと緊張感と疲労と筋肉痛。

やっぱり私の情緒はグチャグチャで――

待たないでえという心の嘆きは、口には出せなかった。

* * *

広い広い城の敷地内には、騎士団員の居住区も存在する。

外観が全く同じである大きな四階建ての建物が二棟。その内右側の建物が、第二騎士団のものだ。

構造としては一階に客室やトレーニングルーム、二階からは順に第一部隊、第二部隊、第三部隊専用フロアになっている。

ということで私達第二部隊は、大体三階に居ることが多い。

第二騎士団の寮兼詰所に帰ってきた私は、まず三階の談話室に向かっていた。

廊下を通りアーチをくぐり抜け、豪華な赤と黄色の絨毯が敷かれた空間に足を踏み入れる。

広い談話室はドアが無い作りで、入って左側の壁際に二人掛けの

布製ソファがある。

そしてそこに、目的の人物が座っていた。

見慣れた男性が優雅に足を組んで腰掛けているのは、クリーム色のふかふかのソファ。壁を背にして置かれているそのすぐ前には、コーヒーターブルがある。

彼から見て左斜め前には一人がけのソファがあり、『大事な話』をする隊員はそこに腰掛ける習わしだ。

お気に入りソファに座って優雅にコーヒーを啜る我らが隊長、アストラ。彼はマグを片手に、何やら書類を読んでいるようだ。

他には誰もいない。待てと言ひ渡される様子もない。

暫く様子を見ていた私は大丈夫そうだと判断し、早足にソファへ近付いて行った。

こちらに向いた翡翠の瞳が静かに私を睥睨している。

珍しく開眼している様子に大変ビビり散らかしながらもどうにか
平静を装って。私は彼の右手前に跪いた。

「隊長、無理です！」

「おやおや」

両手を組んで顎の下に持っていき、私はアストラ隊長様を崇め奉
る。書類を左の座面に置いた隊長は、美しい所作でマグを口許に寄
せ、コーヒーを口に含まれた。

コクリと飲み下して、突出した喉仏が上下する。

「無理ということは、ないはずだよ？」

「いいえ、無理です……！カウル隊長が悪い方ではないと重々承知
しておりますが、私にはどうしても、荷が重くて……！」

許してください！と必死に乞い願いながら、私は上官様に縋る。
隊長はたつぷりと時間をかけてコーヒーの香りを堪能した後、流

れるような動作でテーブルの上にマグを置いた。

そして惚れ惚れするような所作で、長い足を組み直す。

「……そう。どうしても、無理なんだね？」

「……！はいっ！」

こんな私との縁談に前向きであるカウルさんには、大変申し訳ないのだけれど。

魔術師としての功績も、男性としての魅力もとてつもなく素晴らしい人なのだから、私にはもったいないとも思うのだ。

彼を恐れないもつと素敵な女性と、是非お付き合いから結婚までいってほしい。

そんな願いもあつて、どうにか許してくれそうな隊長に、私は顔を輝かせて笑顔を向けた。

「じゃあアナスタシア」

「はいっ！」

よかった、これでなんとかなる。日常に戻る。

そう喜んで、私は隊長の次の言葉を心待ちにしていた。

「カウルとのお見合いを蹴るのなら、僕と結婚だね。それでいい？」

「……………えっ？」

ぶわっと。私の全身から大量の汗が吹き出す。変に固まった笑顔のまま隊長を見つめるが、嘘だと言ってくる様子は無い。

「じよ、冗談ですよね？」

「ううん。知っての通り、僕は冗談が嫌いなんだよ」

一瞬で、全身が汗びちゃだ。

実はここ五年ほど、こちらの隊長様から予言めいたことを言われてきた。その内容は『早くいい相手を見つけないと大変なことになるよ』というものだったのだが――

（それってもしかして、『早く結婚しないと僕がもらっちゃうよ』って、こと!?)

いやいやそんなまさかと必死に否定しようとするが、この隊長だからこそ有り得る気がする。

私に気があるわけではないと思うのだが、性質的にピッタリだから嫁にしても良いとは思われていそうだ。

ま、マゾではないはずなのだけど。

「ああそうだ。これ、見る？」

「へあ？な、なんですか？」

ペラリと渡されたのは、一枚の紙だ。

良い香りのする便箋ではあるが――

（待って、この香り……！お母様が好きな香水の香りだわ！）

馴染みの有りすぎる香りを嗅いでつい実家にいる心地になってし

まったが、これは大問題だ。

私は慌てて手紙の内容に目を通し——やがて、泡を吹きそうになった。深窓の令嬢ならば卒倒していたことだろう。

「見合い相手については上手いこと濁しておいたから、それが僕になろうとカウルになろうと、後から整合性はとれるよ」

「……………」

つまりもう、外堀は埋められているということだ。

愕然としながらも一度手紙に視線を落すと、娘の晴れ姿が見れると喜ぶ母の言葉があった。

騎士になると子供の頃から言っただけで聞かなかったお転婆貴族令嬢。

そんな娘の姿に母は戸惑いながらも、決して否定はしなかった。

「……カウルさんとお見合いを、進めます」

「——おや。フラれてしまったか」

まあいいやと笑う隊長の表情は、いつも通りほとんど読めない。けれど確かに、満足そうには見えた。

「カウルは僕の数少ない友人だからね。彼と君の仲が上手くいくと、僕も嬉しいよ」

「……はい」

絨毯の上に突いたままの膝へ、私は手を置いた。

一緒に降りていった手紙がカサリと音を立て、風に乗って薔薇の香りが広がる。しょんぼりと項垂れる私を目にして、アストラ隊長は仕方ないなあと溜め息を吐いた。

「こっちへおいで。座りなさい」

「はい……」

静かに立ち上がって、私はテーブルの手前を通ってから彼の隣に腰かけた。

今日も良い香りがする上官様は肘置きに右肘を突いて、頬杖の体勢になる。

「何が不満なのさ。良い男だろう？ アレは」

「そうなんですけどお……なんかあ、こわくてえ……」

私の返答を聞くなり、アストラ隊長は大きく溜め息を吐いた。

「たまにいますんだよねえ、アレを怖がる女。面倒見の良いでっかい男なんて、すぐに売り切れるものだろうに——未だに独身だ」

「……………」

憐れなものだよと嘆く本人もまた、独身なのだが。私とて独身だしこの人がこわいので、余計なことと言わないでおく。

「まあいいや。交流を深めていけば、その内慣れるでしょ。敵前逃亡は自害だよ」

「敵……」

現代では上官からの自害命令など許されない暴挙である。なので隊長も本気で言っているわけではないと分かるのだが、友を敵と呼ぶなんてぶっ飛んでいる。

——しかしそれは、何ともこの人らしい。

「敵と思えばお前は、怯まないだろう？うちの隊で一番の脳筋なんだから」

「……はい！」

褒めてないよと突っ込まれても、嬉しかった。

本当に、飴と鞭の使い分けが上手い。

鬼上官ではあるしとんでもないサディストの意地悪ではあるが、この人の選択はいつも正しいのだ。だから皆こわいこわいと隊長に怯えながらも、ずっとなついてきている。

「あとね、あの男は馬鹿が付くほどの世話焼き魔人だから、沢山頼

ってやるといいよ。自分が拾ってきたガキ三人の面倒を、結婚するまで見てやっただくらいだからね」

僕には考えらんないやーと舌を出した隊長に、私はほんのりと苦笑した。

この天邪鬼な上官様があのカウル隊長と友人だというのに、初めて納得する。何だかんだで、似た者同士なのだろう。

部下の面倒の見方は真逆だが。

「こっちで非番は調整しとくから、連絡するまで普通に過ごしてて。いいかい、仲良くするんだよ」

「はい、アストラ隊長」

うん、といつも通りニツコリ笑った隊長は、心なしかいつもより優しく見えた。

2. まさかの見合い相手

よく晴れた日のお昼前。

可愛すぎないシンプルなワンピースに身を包んだ私は、天気とは反対に重い気持ちで待ち合わせ場所に向かっていた。

昨日、隊長から「明日非番ね。デートしておいでー」と言われて。もっと事前に教えてよお！と心の中で文句を言いながらも、賢明な私はじつとりと見つめるだけにとどめた。

しかし「なにか？」と笑顔で問いかけられれば、「いいえ！」と答えることしか出来ず。結局その場では尻尾を巻いて逃げ、後ほど呼び出されて稽古をつけられてしまった。

お陰で昨夜は死んだように眠り、朝には自慢の回復力で元気いっぱいになった。

なのに心は曇り模様。どんよりとした心地で、街の中を歩いている。待ち合わせ場所に向かっているのだ。

（デート……デートかあ）

最後にしたのは、もう——五年以上も前になる。

あの頃は若かった。何も知らない小娘であった私は、よく考えずに告白に頷き、軽薄な第一の騎士と付き合ったのだ。

付き合って三日で『そういうもんかな』と処女を捧げ、付き合って一週間で飽きたと別れを切り出された。

最初から最後までよく分らなかった初めての男性経験は、今思えば黒歴史と呼べる。

要するにあの男は、『女なら誰でも良いタイプ』だったのだ。いや処女なら、か。

それに懲りて以来、告白をされても本気じゃなさそうに思えてし

まっつて、全て丁重にお断りしている。

何より騎士団は男性職場だ。大体皆女に餓えているから、告白だ
けならよくされる。

殆んど関わりが無い騎士からある日突然口説かれるのなんて、履
いて捨てるくらいにある。イチイチ真面目に取り合ってられない。

それに私はこの仕事が好きだ。鬼のように強い隊長はこわいけれ
ど、憧れの対象でもある。

認められたくて。近付きたくて。

恋に現なんて、抜かしていられなかったのだ。

そんな私を心配して、去年の誕生日に母が贈ってくれたのがこの
ワンピースだ。

大事にとっておいてよかった。

これが無ければ、今日着ていくものに困っていただろう。

（まだ、来てない……）

城下町にある噴水広場。

見上げた時計は、待ち合わせ時間の十分前を指している。多忙な人だから、もしかしたら遅れて来るかもしれない。

私はベンチに腰かけて、そつと息を吐く。

（お会いしたらず、前回の無礼を謝罪して——それから、逃げ腰になるのは止めて、きちんと向き合おうと告げなくちゃ）

退路を絶たれた上での選択ではあったが、カウルさんとの縁談を進めると決めたのは私自身だ。

騎士として、自分の選択には責任を持たなければならない。

どんな道を歩もうとも、お天道様や国王陛下に顔向け出来ないことは、しないと心に誓っている。

何より——こんな私の背中を押してくれた両親に、顔向けできない

いことはしたくない。遠くの領地で跡取り息子として頑張っている弟に顔向け出来ないことを、したくない。

私はぼうつと吹き上がる噴水の水を見上げて、自分と向き合う。

カウルさんへの恐怖を克服するには、どうするべきか——それを真剣に考えるのだ。

前回お会いしたのは五日前。

あの時は密着さえしていれば、恐怖は霧散した。

中途半端に離れているから彼の威圧感を感知して、恐れてしまうのかもしれない。それならばいつその事ピッタリとくつついて——

「——……」

ふと何かが琴線に触れて、私は膝に置いていた指をピクリと跳ねさせた。直ぐ様思考を中断させ、一瞬だけ乱れた呼吸を正常に戻す。そうしてぼんやりと噴水を見ている風を装い、意識を後方に向け

て気配を探った。

（――ふたつ、いや、みつつ）

性格には六つだが、それだけの目がこちらを見ている。

位置的には左斜め後ろ。角度は三十度。位置は――四、五メートルほど離れた場所か。恐らく全員男だ。

（何のために私を見張っている？……もしかして）

我らがアストラ隊長は優秀な御仁だが、あの性格なので敵が多い。それに本人は決して明かさないが、たぶん高貴な血が流れている。だからたまにいるのだ。どうにか弱点を握ってやろうとする者が。――どうにか彼を消し去ろうとする者が。

そうして機会を窺っていた人間が、お洒落をして出かける彼の部下を見かけた。しかもそれは、標的が特に気にかけている『お気に入り』の女騎士だ。

もしかして二人でコソコソ密会か？などと考えているのかもしれない。きっと不審者達は、アストラ隊長の弱味を掴めるかもしれないと、息巻いているのだ。

「……………」

私はチラリと、時計を見た。

約束の時間まで後五分。——それまでには『片付け』られそうだな。ならば私がやるべきことはただひとつ。殺気立たないように注意して、ふう、と悩ましげな溜め息を吐く。

それから暫し逡巡したフリをして、私は席を立った。

ちよつとだけ落ち込んだ気配を醸し出しながら、広場を抜ける。そうするこちらを見張っていた三人も動き出した。

（よしよし、ついてきてる）

私は早足にならないようにと注意をして、大通りを歩く。

そうして路地への入り口に差し掛かったところで、少しだけ足を止めて。悩んだ素振りを見せてから、狭い路地に足を踏み入れた。

後方では焦ったように足音が立ち、三人の人影が追いかけてくる。私は暫く路地を進み——やがてひと一人が通れる細い小道を見つけた。それから足音を立てずに素早く動き、そこに身を潜める。

近付いてくる足音を耳にしながら静かに鞆を地面に置き、右手でそつとスカートをたくし上げる。

太ももに巻いているベルトから短剣を抜き取り——それから先頭の一人が目前にやってきた瞬間。

「……ッ!? ——ッッ、……はっ?」

腕を捻り上げて足を払い、先頭の男を即座に拘束した。

「動くな。名前と所属を言——はっ?」

腕をギリギリと捻り上げ、残り二人に短剣を突き立てながら。

視界に映ったふたつの顔に、私は素っ頓狂な声を上げた。

こっちもそっちもあっちも、皆見覚えのある顔だ。なんならそちらにいる金髪碧眼の御仁なんて、昨日会ったばかりである。

奥さんが久々に実家の手伝いをするとかで、大森林基地までわざわざやってきていたのだ。

そして仕事中なのにベタベタに引っ付くものだから、奥さんに『ちよつと離れてて』と叱られ、しよげていた。

「い、てててっ！」

「あつ、すみません……！」

慌てて手を離せば、今の今まで腕を捻り上げていた相手——ガスくんが腕を擦る。

黒髪にグレーの三白眼。高い背丈。ああ、久々にお会いしたが間違いないガスくんだ。

確か最近、奥さんが二人目をご出産されたとか。そんな話を風の噂では聞いた覚えがある。

「いやあ、はははは……」

ドリーさんの隣で苦笑して頭を掻くのは、第一騎士団第二部隊隊長のカイエン殿だ。

優男系の風貌だが意外と鬼上官と聞いている。

私は厳しい訓練を思い出してブルツと震え上がった。

「あ、あのお……皆さん、どうして……」

私がやっちゃったとブルブル震えながら声をかければ、カイエン殿がどうどうと手を動かす。

私はハツとしてから短剣を地面に置き、彼に敬礼をした。

「いやいや、いいいいよ。俺達今日は皆非番だから。楽にしてて」「はっ、しかし……」

宥められても尚私が姿勢を崩せずにいると、ガスクさんが立ち上がった。ア、スミマセン……。と言えは彼は静かに首を横に振った。

「いや実はね、俺は妻の代理なんだけど——」

カイエン殿がわけを話してくれようとした瞬間、ゴーンゴーンと正午を知らせる鐘が鳴った。

私を含めて皆、路地の入口に顔を向ける。

「あっ！待ち合わせ……！」

「はっ、急ぎましょう！隊長はきつと来ています！」

ドリーさんの声を皮切りに、私達は走り出した。

男三人と女一人——しかも一人のみ退職済みであるが、皆軍事関係者だ。

鍛え上げられた肉体を使って素早く移動する四人組に、街行く人達は何事だと視線を向ける。

そうして一分と経たずに噴水広場に戻ってきた私達は、慌ただしく立ち止まった。引退済みのパン屋と魔法専門の魔術師のみが軽く息を乱し、私とカイエンさんは全く息を乱していない。

「お前達……」

「あわ、お、遅れてすみません……!!」

黒のトラウザーズに白シャツと紺のベストというシンプルでありながら大変お洒落な出で立ちをしたカウルさんが、走ってやってきた私達を見て驚いている。

なんなら私の手には、短剣まであるのだ。そっとそれを私から奪いながら、カウルさんは困った顔をしている。

デートに来たら見知った顔が三つ追加で現れて、カウルさんは微かに目を泳がせていた。

「いや隊長、実はですね――」

息を整えたドリーさんが、かくかくしかじかと説明をしてくれる。実はドリーさん、昨日大森林に來た時にある筋から明日カウルさんと私、アナスタシアがデートをすると聞いたらしい。

その上でお見合いをして、今は相性見極め中だとも聞いたただとか。カウルさんが乗り気であると聞いたドリーさんは、大喜び。

一人でこの喜びを噛み締めるのは良くないと慌てて下町のパン屋に向かい、ガスクさんに教えた。

その後城に戻るとカイエン殿を探し出し、シェリルに伝えてください！と伝言を頼む。そしてカイエンさんはそれを奥さんに伝え、気になる！気になる！と前のめりで食い付かれたらしい。

そうして今日様子を見に現地にやってきたら、三者三様、ばったりと出くわしたようだ。

——因みにシェリルさんは本人が来たいと言っていたらしいが、

危ないから却下したと、カイエン殿はケロッと言った。なかなか過保護である。

——いいやそれより。そんなことよりも。

「ううう……っ！」

「わ、なんだ？」

「えっ？アナスタシアさん？」

ガスクさんとドリーさんが驚いているが、それどころではない。

この、腹の底から沸き上がってくる怒り。やるせない感情。

私は貴方が危険な目に合うと思って、その危険を排除しようとしたのに。止められない。ああ、腹立たしい。憎らしい……！

「信じッ、らんない！意地悪！極悪！鬼、悪魔あ……！」

「あ……うん。まあ、そうだよね」

察しがついていた様子のカイエン殿と、顔を見合わせているガス

クさんとドリーさん。ブンブンと握った拳を振り下ろす私。

短剣を持っていない方の手で首を撫でるカウルさん。

昼間の噴水広場が、地獄絵図と化す。

「ひどい、酷い！ いじわるう……」

「あー、カイエン殿。これ、頼めるか」

「ああ、うん。任せて」

脳内でダブルピースをしている上官に恨み辛みを吐き出しながら、私は大きな手に肩を抱かれた。

情報源など、ひとつしかない。あの鬼が面白半分で洩らしたのだ。私達二人をくつつけたいのか失敗させたいのかわけが分からない。

あの天邪鬼め。天邪鬼めえ……！

「この二人には俺が説明しとくよ。……邪魔したね」

「ああ。じゃあな、ガスク。今度またパンを買いに行く」

「ういっす」

カウルさんから短剣を受け取ったカイエン殿が、私達に軽く会釈をしてからガスクさんとドリーさんを引き連れて立ち去っていく。

私はムカムカとしながらほんのりと目に涙を滲ませ、良い香りのする逞しい体に抱き締められた。

「底意地の悪い上官には困りものだな？」

「ぐすっ、本当ですよお……」

いつもいつも、振り回されるのは下の者なんですよお、と愚痴をこぼして、清潔なベストに顔を埋める。

すると苦くてほのかに甘い香りが、詰まりかけの鼻を擦った。肩を撫でる手は大きく、その手付きは優しい。

「ベンチに座ろう」

「うう、はいい……」

支えられながら私はベンチに座った。

左側に座ったカウルさんの体が大きいせいで、どうにも狭い。

筋肉質な太ももが私の太ももにぴったりとくっついていて、その
上肩も抱かれているから、足以外も体の左側面が密着していた。

「……落ち着いたか？」

「あ……はい」

隣にある体に意識を向けて、ドキドキとしていたからか。優しく
宥められている内に、苛立ちや悲しみは薄れていた。

——最近どうにも、情緒不安定でいけない。

いや前々から隊長には振り回されていて、度々怒りが爆発しては
いたのだが。こんな風に人前で暴走するのは初めてだ。

怖い怖いと思いつつも、カウルさんから包容力のようなものを感
じ取っているのかもしれない。

身勝手だなと思いつつ、自分の行いを恥じて。私はグツと黙り込んで俯くと、じわじわと顔を赤面させていった。

「……あいつらには、俺から良い具合に言っておく。だから気にするな」

「……、……すみません」

優しく肩を撫でてくれるカウルさんは、隊長が言っていた通り本当に面倒見が良いようだ。

今も私が恥じ入っていると察して、フォローしてくれたのだろう。
(怖いと思うの、やめたいなあ)

カウルさんの人柄を知って、荒んだ心を癒してもらって。私は心から、この人への恐怖を克服したいと思った。

こうして傍にいと平気なのだ。何か良い解決策は無いだろうか。

「あの、カウルさん……」

「ん？どうした」

私は顔を上げると、上目に整ったかんばせを見つめた。

キュツと彼の服の裾を握り、考えを巡らせながらコクリと生唾を飲む。すると穏やかにこちらを見下ろしていた黒い瞳が微かに見張られ、喉仏が上下した。

「私……カウルさんと、仲良くなりたいです」

「………、仲良く……」

はい。と頷けば、突出した喉仏がまた上下する。

心なしに涼やかな目元が赤く色付いているようで。揺れてからまた私を射貫いた瞳には、熱が籠っているように見えた。

「……あの、だめですか？」

「いや……駄目と、いうわけでは……」

彼のはっきりとしない返答に、私は首を傾げた。

難しい相談では無いと思うのだが——もしかして、変な要求をしてしまっただろうか。

目上の男性に『仲良くしたい』は、拙くも失礼であつたかもしれない。

「あ……う……。すみません、やっぱり」

急に居たたまれない心地になって、私は要求を撤回しようとした。余分なスペースなど無いベンチの上で体を離そうとして——咄嗟にガシリと肩を抱かれる。

「いや構わないっ！……その、仲良く、しよう」

「えっ？あ……は、はい。……??」

私は後ろから回った手で右肩を撫でられ、左手を大きな手ですっぽりと包み込まれた。

彼が動揺している理由が分からない。やっぱり発言が幼稚すぎた

かと己の発言を悔いるが、謝るのも撤回するのも難しい雰囲気だ。

だから私はとりあえず黙って、されるがままになっていた。

それにしても大きな手だ。ゴツゴツとしていて、剣だこもある。

きつと不足の事態に備えて肉体戦の鍛練もしているのだろう。

通りでこんなにかたいが良いものだとな納得して。私はつい、自ら

その感触を確かめにいつてしまった。

「すつごく大きいですね。それに、硬い」

「……………ああ」

思わず声に出して褒めれば、長い沈黙の後に返事がやってくる。

櫛つたいのかな？なんて思いながらも、私は彼の掌を撫でていつ

た。ザリザリゴツゴツ。どんなに鍛練しても、女の手ではここま

ではならない。

きちんと保湿するのもあるだろうが——大ききなんて、桁違いだ。

「すごいなあ。ご立派ですねえ」

「……………そうか」

鍛練の賜物だ、と感動して撫で回していると、カウルさんはそつと私から顔を背けた。あれ？と思いながら両手で彼の左手を握ると、私の肩を掴む手に力が入る。

「そろそろ、行こうか」

「……………はい」

どこに？と思いながらも、彼が立ち上がったので私も立ち上がる。左手を取られ、指の間に太い指が絡まった。まさかの恋人繋ぎだ。ドキドキする。

歩調を合わせてくれる長い足は既に行き先を決めているのか、迷い無く進んでいく。

「だがまあ、まずは腹ごしらえしてから……………な？」

「……??はい……?」

一体何が腹ごしらえをしてからなのだろうと、疑問に思いながら、カウルさんと共に街角に消えていく私であった。

* * *

ランチを終え、先導するカウルさんに手を引かれながら向かった先は——ちよつと豪華な宿だった。

「あの……?」

開けてもらったドアを通り、客室に入って。カチャリと鍵を閉めるカウルさんを振り返ると、私は首を傾げた。

連れて来られるまま来てしまったのだが、どうして宿なのだろう。

「座ろう」

「あ、はい……」

左から密着されて肩を抱かれて、長椅子とテーブルのセットへと近付いていく。

すぐ傍まで近付くと左手を引かれ、彼が左に、私が右にと隣り合って腰かけた。

二人がけの長椅子はふかふかで座面にゆとりがあるのに——カウルさんが大きいから、少しだけ窮屈だ。

カウルさんはふうとひと息吐いて、ベストの胸ポケットを探った。しかし次の瞬間にはハツとして、かぶりを振る。

「どうかされましたか？」

「いや、なんでもない」

ふう、とまた息を吐いて。カウルさんはチラリと横目でこちらを見た。

——流し目がセクシーだ。黒曜石のように艶やかな瞳で射貫かれて、私はドキリとしてしまった。

「あ……っ」

膝上に置いていた左手に、大きな手が重なった。包み込むような触れ方にまた胸がドキリと跳ねて、顔に熱が集まり出す。

（も、もしかして……私が仲良くしたいって言ったから、二人きりになれる場所に連れてきてくれたのかな？）

今思い返せば、あれはなかなか恥ずかしい要求だった。

貴方と仲良くなりたいです、なんて——幼稚も幼稚、まるで子供のような発言だ。

途端に気恥ずかしくなった私は視線を斜め下に落として、右手でスカートの生地を弄る。

「……………」

「……？」

カウルさんが動いたのでチラリと上目に様子を窺えば、彼は左手で口許を覆い、視線を左下に逸らしていた。

目元がうつすら赤らんでいる。

カウルさんはカウルさんで、何だか照れているみたいだ。

良い年した大人が二人して照れているなんて、ちょっとおかしい。私は何だか楽しくなってしまうって、小さく笑った。

「……あっ」

また、色っぽい流し目だ。

カウルさんの体がこちらに向いて、彼の口許を覆っていた左手が私の顔に伸ばされる。

そっと頬に添えられる掌は大きくて、熱い。

少しずつ、近付いてくる整った顔立ち。黒い睫毛は意外にも長い。

ドキドキと暴れる鼓動がうるさくて。私は耐えきれずにそっと、目蓋を下ろした。

「ん……っ」

重なった唇は——柔らかかった。

魔煙草の香りはしない。

……ああそうか。だから胸元を探ろうとして、止めたのだ。

今は魔煙草を吸うべきではないと、判断したから。

——ならばあの時から、キスをするつもりでいたのだろうか。

「……は」

「……っっ」

ちゅぴりと可愛らしい音が鳴って、触れ合っていた唇が離れる。

私は足元から這い上がってくる羞恥にぶるりと震え、静かに俯いた。

「……耳まで、真っ赤だな」

「んっ」

左耳の縁を、硬い指の腹が撫でる。

すぐ傍で聞こえた低い声が少しだけ、掠れていて。絶大な色気を孕んだ声色に、腰がゾクリとした。

「こっちを見るんだ」

「っ、……あっ」

少しの逡巡の後、そろりと視線を上げた私は——艶めく黒色に真っ直ぐ射止められた。

ハッと息を飲んだその瞬間に、かぷりと口を食べられてしまう。

「あ、ん、んっ♡……ふ♡んん……♡」

「ふ……♡は、ん……♡」

大きな舌で唇をべロリと舐められて、下唇をぢゅうっ♡と吸われる。頬に添えられたままの左手の指先では、スリスリと耳を擦られる。

ていた。

「はっ、はっ♡んん、ふ、うん……♡」

不慣れなのを悟られないようにと余裕なフリを見せようとするが、私はキスに応えるどころか息をするのでいっぱいだった。

年上であるカウルさんはゆったりとした大人の余裕を漂わせ、舌や唇を使って私を翻弄する。

私の唇を舐めたり吸ったりとするその刺激はとても甘くて、なんだか甘やかされているような心地になった。

「ん、口を開けてくれるか？」

「あ……は、はい……♡」

彼の右手でそろりと左の太ももを撫でられた私は、ビクリと腰を震えさせた。大きな手は私の太ももなんて簡単に掴めて。それにゾクゾクとしながら、ゆっくりと口を開いていく。

「……あ、……あっ♡」

ぬるりと唇の内側を擦ってから入ってきたのは、熱い舌だった。魔煙草を吸っていても口臭ケアをしているのか、不快な匂いはしない。私は齒列をなぞられる感触にビクビクと体を跳ねさせ、両手で彼の服を握った。

（舌、柔らかい）

久々のキスは驚くほどに心地好くて——ゆったりとしているのに、情熱的だった。優しく口内を擦られるだけで、気持ちが良い。

（鼻、高い。舌、おっきい……）

性差と魅力。その両方を感じて、私の胸はときめく。

それどころかじわりとお腹の奥が熱くなって、慌てていけないと自分を戒めた。

「ん……っ、ン♡うん……っ♡」

口の中でくちゅりと音が鳴って、舌と舌が触れ合う。

ビクリと体が大袈裟に跳ねて、慌てて平静を装うが——太もものに触れられている上に、舌も密着している。きつと気付かれているだろう。

気恥ずかしさに赤面すれば、優しく太ももを撫でられた。もしかしたらドキドキしていることにも、勘づかれているのかもしれない。

「っ、は……っ♡ん、ん♡」

ゆったりとした動作で、私達はぬるぬると舌同士を擦り合わせる。ただ軽く口付けるだけだと思っていたのに、思っていたよりもずつと濃厚だ。

太ももを撫でていた彼の右手は後ろから腰に回り、私の体を引き寄せた。

ねちねちくちゅくちゅ。積極的に絡み付く舌と、それを受け止め

ながらたまに動く控え目な舌。

時折ちゅっ♡と唇を吸われれば、面白いくらいに体が跳ねた。

口頬を舐められて頬がもごもごついて。それから歯列をなぞられ、上顎を擦られる。

「んっ、ふぁ、んんっ♡」

「はぁ……♡ん、ん……♡」

私はちゅっ、ちゅっ♡と上唇、下唇の順で彼に吸い上げられた。

その快感で開いた口にはぬろりと舌が入り込んで、口腔内をあちこち舐め回される。激しくなった口付けにビクビクと内ももが跳ねて、脳内が白く霞んでいった。

やがてたっぷりと時間をかけて私の口内を味わい尽くした後。ちゅう、と私の下唇を吸って、カウルさんは口を離した。

「……嫌では、なさそうだな？」

「あ……♡は、い……♡」

右耳のすぐ傍で低く囁かれて、ゾクゾクと甘く腰が痺れる。

壮絶な色気を前に、私の理性は風前の灯火だ。いくら駄目だと思ってもお腹の奥がジクジクとして、膝を擦り合わせてしまう。

カウルさんはそんな私の足をチラリと見下ろして、クツリと喉で笑った。ゆったりと右の腰を撫でられて、ビクビクと体が跳ねる。

「ベッドに、行こうか」

「あっ……あ、で、でも……」

ムラムラとしてしまっていることに、気付かれてしまった。

そう思った私はグルグルと目を回し——左のこめかみに口付けられたせいで、興奮からブルリと体を震わせる。

「うん？横抱きをお望みかな？」

「……っっ」

耳元で意地悪に低く囁かれて、私はゾクゾクと這い上がってくる興奮で頭をクラクラとさせた。

「だ、だいじょうぶ、です」

慌てて立ち上がれば、低く笑う声が聞こえる。

私はかああっと顔に熱を集めて黙り込み、そっと俯いた。

「そうか。それは残念だ」

大きな体をゆったりと動かして、彼は立ち上がった。

それから私の手を取り引いて、歩き出す。

もちろん向かう先は——やたらと大きなベッドだ。

まさかそこで、二人仲良く惰眠を貪るわけではないだろう。

まさかの展開に鼓動が暴れ、脳内が白く霞んでいった。

（ちゃ、ちゃんと……できるかな？）

未経験ではないが、経験回数が極端に少ない。

その上最後に致したのは、五年以上も前になる。

自慰するとしても中に触れないので、もしかしたら処女に戻っているかもしれない。

処女膜が戻るなんて、そんなことは考えていないけど。

「あの、私」

私は寝台に上がって真ん中に座り、後からやってきたカウルさんの顔を見上げる。すると丁度その瞬間。顔に影がかかり、私はキョトンとしている内に唇を奪われた。

顎を指先で掬われ、上向かされて。寝台の上で膝立ちになったカウルさんに、私は食べられてしまう。

「あっ！まっ、んんっ♡ふ、んう……っ♡」

首元のボタンをプツプツと外されて、慌てるけれど。

やたらねちっこく口内を舐め回されてゾクゾクしている内に、ボ

タンはみぞおちの辺りまで外されてしまった。

「んっ、んうっ♡」

私はゆったりと口内の粘膜に熱い舌を這わされながら——腰を撫でられ、肩を撫でられ、背中を撫でられる。

そうしてビクビクと体を跳ねさせていると太ももまで撫でられて。はあっと熱い息を吐き出した瞬間、開かれた服の隙間に熱い手が滑り込んだ。

「あ……っ！ま、まって」

「……残念だが、待てないな」

口付けを解いて制止するが、すぐにまた口付けられてやわやわと左乳房を揉まれた。

大きな手に、すっぽりと。色気のない下着に包まれた私の胸が包まれている。

「あの、あのっ」

「大丈夫だ。俺に身を任せているといい」

決して毛深い方では無いと思う。けれどこんなことになるとは思ってなくて——最低限の身だしなみしか整えていない。

それにシャワーも浴びていないのだ。

いや昨夜は浴びて全身ピカピカにしたが。こういう時は事前にシヤワーをして綺麗にするのがマナーではないのか。

「脱がすぞ」

「えっ！……あっ、あわっ」

前が大きく開いたワンピースを、肩からスルリと脱がされる。

そうして露になった上半身と、腰でクチャツと纏まっているワンピース。

「ひゃ、あんっ」

ちゅっ♡と左肩に口付けられて大袈裟に反応しているとまた胸に手を這わされて——今度は両手で、下着ごと胸を揉まれだした。

「んっ♡ふ、んんっ♡」

「……ふっ」

じっと顔を見つめられながら、大きな手で胸を揉み込まれている。じんわりとした快感と、つぶさに観察される羞恥。

その二つが綱交ぜになって、私はじわじわと顔を赤らめた。

「真っ赤になっているな。可愛い」

「……っ」

人差し指で顎を掬われて、上を向かされる。それからズイツと迫ってきた整ったかんばせに、私は再び唇を奪われた。

「んっ♡ふうっ♡く、んんっ♡」

「ん……♡ふ……♡」

口内をぶ厚い舌でにゆるにゆるぐちゅぐちゅと掻き混ぜられ、齒列を丁寧になぞられる。その間も彼の両手は緩やかに、そして大きく私の乳房を揉み——私は少しずつ、体を後ろに倒していった。

「——あ……」

そうしてとうとう、刺激と彼の圧に押し負けて。私は後ろに倒れ込み、ポスリと背中をシーツに当てた。

「……………」

「あ、あ、カウルさん……」

無言で覆い被さって来る大きな体。

黒曜石の瞳の奥にキラリと鈍く光る輝きを見つけて、私は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなってしまった。

「んんっ！ンッ、ううっ♡うんんっ♡」

これまでより荒々しく唇を奪われ、熱い舌で口腔内を蹂躪される。

更には舌をベロベロに舐め回されて、しつこく絡みつかれた。

「んっ！んーっ！んうっ♡んんっ♡」

ちよつと強い力で乳房を揉まれた私は、どうしようもなくドキドキとしていた。

のしかかられているのに近い体勢だから、普段感じているカウルさんへの怯えにも似た感情を抱いているのだが——それが興奮と直結し、奥底で秘められていた私の被虐心を暴き出す。

——アナスタシアって、隠してるけどエムつけあるよねえ。

情事中に違う人のことを考えてはいけないと分かっている。

それでも私の脳内では、アストラ隊長の言葉が思い返されていた。今まさに、そのエムつけが花開こうとしている。

だめだめと焦るのに、カプツと下唇を噛まれて。私はビクンツと、体を跳ねさせ、感じてしまった。

「ん……？少し痛いくらいが、お好みかな？」

「……あっ」

話し終えるなり、また下唇を噛まれて。そのまま引き伸ばされながら、ぎゅうっと両方の乳房を握られる。

「あ、あ、あっ」

痛くはない。けれど圧倒的強者に嬲られているような——そんな心地になった。そしてそれに、びっくりするくらい興奮している。

「……こうすると、どうだ？」

下唇をパチンと離されて、私は下着越しに乳嘴を摘ままれた。

——グリッ♡

「あんっ！ふあ、あっ！」

そうして両方同時に、強めに押し潰される。

今度は、ちよつと痛い。でもそれが堪らない。

「お……♡おお、おっ♡♡」

「良さそうだな。……はは、一気に表情が蕩けた」

グリッ♡グリグリッ♡上に親指、下に人差し指を当てて。私の乳首は、強かに押し潰されて擦られていた。

ちよつと痛くて、気持ちが良い。とつてもゾクゾクする。

お腹の奥が煮立ったように熱くなっていた。

下腹部がジクジクとしていて、猛烈な疼きを発している。

「舌を出してくれるか？甘噛みしてやろう」

「あ……♡は、はいっ♡」

私はこわい男性にのしかかられて痛いくらいに乳首を弄くられながら、無様にレッ♡と舌を突き出した。そうするとカウルさんの顔が寄せられて——カプリと舌に、噛みつかれる。

「お……っ！」

柔らかな舌にめり込む、硬い感触。それは舌尖から根本に向けて、はみはみと噛み進めていく。

「おっ♡♡♡おっお、おっ♡♡」

力は強いが、痛くはない。

けれどひと噛み毎に私の腰には夥しい量の快感が流れ込み、乳首をグリグリされる度により膨れ上がった。

（こ、こんなの、逃げられないよう♡♡）

そもそも逃げるつもりもないのだが。

絶対敵わない人に襲われて、これから性的に嬲られるのだと私は想像する。

イヤと言っても止めてもらえず、奥の奥まで犯されて。泣きながら懇願しても容赦なく蹂躪される。そんな瞬間を想像して、私はスリスリと膝を擦り合わせた。

「腰、上げられるか？」

「は……はい……♡」

未だ中途半端な状態で纏わり付いているワンピース。

それを脱がそうとしているカウルさんに、私は大人しく従った。

「……っ」

大きな手で下に引かれたワンピースが、腰や足を撫でて爪先から抜けていく。そうして現れたのは、何ともやぼったい下着姿だ。

ショーツに関しては綿製だし、胸当てと色すら合っていない。

もっとマシな下着を身に着けてくれば良かったと後悔して、私は自分の腕を擦った。

でもよくよく考えたら、うちに勝負下着なんてものはない。

「あ……あわっ」

布擦れの音が聞こえて視線を上げれば、カウルさんはバサバサと

豪快に服を脱いでいた。

咄嗟に探したワンピースは、彼が床に放ったベストの上に畳んで置かれている。それを見た私はホッと安堵の息を吐いた。

「……っ！」

しかし視界に肌色が映り、それどころではなくなってしまう。

どんどんと露になる美しい肉体美に、私はそっと目を逸らした。

チラッと見えただけでも胸筋と腹筋が凄かった。

視界の端に映っている二の腕も、めっちゃめっちゃ太い。

下半身は視界に入らなかったが、見えなくてよかった。見ていた

らきつと、羞恥のせいで正気ではいられなかったはずだ。

「ちゃ、ちゃんとした下着を買っておけばよかったです」

「ん……？」

一糸纏わぬ姿となった大きな体に再びのしかかられながら、私は

そつと話題を逸らした。

ドキドキすぎて、軽口を叩かなければ身が持たなかったのだ。

膝裏に手を入れられて開脚するようにと促されれば、簡単に体がいうことを聞く。私の精神はいっぱいいっぱいでグルグルと目を回しているのに、体はとにかく素直だった。

足の間に出来たスペースには、カウルさんの右膝が差し込まれる。

「俺は寧ろ、男っ気が無い様子に興奮するぞ？」

「え……っ」

緊張を紛れさせるための話題転換だったはずが、ドキリと大きく鼓動が跳ねた。

サツと顔を赤らめた私は、彼に優しく左側の腰を撫でられる。

熱くてゴツゴツとした手。その手が慈しむように、私の形を辿っていた。

「決めに決めた下着が出てきたら、遊び慣れているのかもと疑ってしまうところだった」

私の顔の横に手を突いたカウルさんが、体勢を低くしてこめかみに口付けてきた。

今や五月蠅いくらいに心臓が暴れている。そして感情の高まりに合わせて、頭がクラクラとしていた。

「あ、遊び……慣れていない方がいいんですか？」

「そうだな」

恐る恐る問いかければ、すんなりと頷かれて。今度は額と鼻先に口付けられる。

そうなんだ……。と小さく呟いた私を、カウルさんはチラリと上目で窺った。

きつと声色に安堵が滲んでいると、気付かれてしまったのだろう。

彼の視線は私の心情を案じるものであった。

（もっとう、面倒臭がられるかと思ってただけど……よかった）
この国では婚前交渉も任意で、皆わりかし好きなように恋人と体を重ねている。

安全性の高い避妊薬が普及しているため、貴族も同じ貞操観念だ。身持ちを固くした方が良いという考える者は少数派で、寧ろ未通だったり不慣れである女性は男性から面倒臭がられる——らしい。

噂で耳にした程度の情報を元に嫌がられるのではと危惧していたのだが、どうやら違ったようだ。

「あの実は……経験が、乏しくて」

正確にはかなり昔の数日間だけは、やたらと経験したのだが。

安堵からつい口を滑らせた私に対し、カウルさんはやっぱり嫌そうな顔はしなかった。

寧ろ顔に薄く笑みを浮かべ、どことなく嬉しそうにしている。

「そうか。それじゃあゆっくり進めよう。激しいのは、また今度だ」
「そう、ですね……」

さっきのちよつと痛くてゾクゾクする責め方を、今日はもうして貰えないということなのだろうか。だとしたらちよつと、残念だ。

強引な愛撫はとても気持ちが悪くて、私は味を占めてしまった。

経験不足を恥じてはいたが、せつかく新たな扉を開いたのだ。本当はもつと、凄い事をしてほしかった。

しかし私だって、流血沙汰は避けたい。

だから納得をしたものの、どうにも気落ちしてしまう。表情を取り繕えなかった私は、シユンと眉尻を下げた。

「今日も少しだけなら痛くしてやる。だからそう落ち込むんじゃない」

「はい……」

よっぽど情けなく見えたのか、カウルさんは緩く微笑んで私の頭を撫でてくれた。

そうしてたつぷりと慰めてくれた後に、ちゅっ私の額に口付けて。カウルさんは静かに身を起こした。

それから私の背中とシーツの間に手を差し込み、胸当てのホックをプツリと外す。

「あ……！」

「………」

慌てて両手で支えを失った胸当てを押さえると、クツリと彼の喉が鳴った。

サツと赤みが差した頬に左手を添えられて、ザラつく親指で撫でられる。そろりと見上げた先では、笑みの形に縁取られた双眸が、

じつとこちらを見下ろしていた。

「あの……」

「うん？」

左頬に口付けられて、顔がもっと熱くなる。

私は口を引き結んでギュツと目を閉じ、羞恥とときめきに耐えた。

——しかしそうしていると、頬から手が離れる。

「えっ？」

腰の左右に熱い手が触れて、器用に指先だけで私の体を僅かに浮かせたカウルさん。呆気にとられる私の鼠径部からは、するりとシヨーツが引き下ろされた。

そうして膝まで降りた布が、無情にも爪先から抜き取られる。

「さあ、あとは胸当てだけだ」

「で、でも」

私があたふたしている内に、カウルさんはベッドの下へとショーツを落としてしまった。

胸当ての生地指を引っかけられて、私は赤面しながら俯く。

「乳首。直接触ってほしくないのか？」

「ちよく、せつ……」

さっきグリグリされて気持ち良かった乳首。

そこに直接的触れてもらえて、あまつさえ噛んでもらえたら――

それはきつと、とてつもなく気持ちが良いだろう。

胸当てを押さえていた私の手から、力が抜けた。

「あ……っ」

隙を見逃さなかったカウルさんは、私の手の下からスルリと胸当てを抜き取ってしまった。

手の平に、ぷつくりと尖った突起が触れている。

クリツ♡と擦れたそこがじんわりと甘い快感を発し、僅かに冷めていた体が熱を上げた。

「ほら、隠してないで。手はこっちだ」

「あっ、カウル、さん……っ」

両手を優しく引っ張られて、彼の肩に掛けられる。

首に絡めて抱き着けということなのだろう。

私が硬い筋肉の感触にどぎまぎしている間に、胸元には熱い息がかかった。

体に緊張が走り、そのせいできゅっと彼に抱き着いて。私は結果的に彼が望んだ通りの体勢となってしまった。

「っ、んん……っ♡」

ペロリと左の乳首を舐められて、走った甘い快感に体が跳ねる。コリツと舌で捏ねられた突起が、驚くほどに気持ちが良い。

「よく尖っているな」

「……っ、恥ずかしい、です」

胸元に寄せられた整った顔立ちがこちらを見上げ、意地悪く笑っていた。醸し出される色気にゾクリとして、内腿が小さく痙攣する。それから私のものよりぶ厚の舌を見せつけられて——見せつけるように、ねつとりと左の乳首を舐め上げられた。

ちゆくっ♡ぬる……♡

「あ、んんっ♡ふ、う……♡♡」

ゆっくりと丁寧に、舌の表面で尖った先端を擦られる。時折ちゅるっ♡と唇で吸い上げられると、反射的に口から嬌声が洩れ出た。温かな口内に含まれて吸われだけで、うっとりしてしまうほどに気持ちが良い。

もう随分と昔に経験した求められる悦びが、じわじわと足元から

這い上がってきていた。

「ああ、カウルさん……♡」

「……はっ、アナスタシア……♡」

じっと見上げてくる黒い瞳を、私は見つめ返す。

そうしていると彼はまた意地悪く微笑んで。口を開くところを私に見せつけると、カリッ♡と前歯で左の乳嘴を噛んだ。

「あ……!」

カリ、カリ、グリッ♡優しいだけじゃない刺激。

今日は激しくしないと行っていたが、これは良いらしい。

それならばと喜び勇んで、私は胸を前に突き出した。

「ん、んーっ♡く、んんっ♡」

「はは、随分と良さそうだ。ん……♡」

カリカリ♡コリコリ♡前歯に挟まれた乳首が食まれている。

堪らない刺激に私はカクカクと腰を揺らし、やがて胸を引っ込めて腰を突き出した。

今では足の間に、彼の胴体がある。だからこの体勢で腰を突き出すと、挿入しているような体勢になった。

興奮と快感で理性を上塗りにされ、思考能力が一気に低下する。

「んいつ♡♡あ、あっ♡」

「いい反応だ♡」

そうして私のはあはあと息を荒らげながら感じていると、右の先端がキュツ♡と摘み上げられた。

尚も噛まれている左側と同時に、コリコリと転がされる。

「そんなに腰を揺らして喜んで——アナスタシアは、乳首を弄られるのが好きなんだな」

「あっ、ふ、んっ♡そんな、ことっ♡ふあっ♡ああ、あっ♡♡」

コリコリ♡カリッ♡スリスリッ♡ぢゅるっ♡

言葉で辱しめるだけ辱しめて、カウルさんは私の乳首を可愛がる。
大きな親指で潰されて擦られる乳首が気持ちいい。

もちろん左側もかみかみと前歯で刺激されていて、気持ちいい。

「そんなこと、あるだろう？」

——カリッ♡ぐりいっ♡

「あ、ぐんぐん♡♡♡」

強めに左の乳首を噛まれて、その痛みと快感でガクガクと全身が
痙攣する。

突き抜けた快感は凄まじく、達していないはずなのに脳天まで鋭
い感覚が走っていった。

「……やっぱり、少し痛いぐらいがいいみたいだな」

「っ、は、い……っ♡あぁあッ♡♡」

素直に認めれば、右をきゅううつ♡とつねり上げられた。

じんわりと痛くて——気持ちがいい。

更にはそのままゴリゴリと指の腹で刺激されて、ものすごくいい。お腹の中がヒクヒクとしていて、今すぐにでもイッてしまいそうだ。

グリ、グリ……♡ぢゅるっ♡カリッ♡

「んっ、んッ♡んっ♡♡んううッ♡」

右を強かに責められながら、左は口でゆったりと可愛がられる。強めに吸い上げられるとその刺激がたまらなくて。私は特別強く体を跳ねさせた。

「……少し、赤くなってしまったか」

摘まみ上げていた指を離して、カウルさんはそう呟いた。

低い声は興奮したように掠れている。

「今度は口で、慰めてやろう。ん……♡」

ぢゅるっ♡ぢゅぢゅ、くちゅっ♡

「あ……っ！ヒッ♡♡♡おッ♡♡」

吸い上げられた右の乳首。

強く刺激されて過敏になっている神経が、苛烈に吸い上げられ——
—かと思えば舌でゆるゆると優しく愛でられる。

「ん、んっ♡ふ、はっ♡んぢゅ、れるっ♡」

くちゅくちゅくちゅっ♡カリッ♡クリクリッ♡

「お、おお、お……♡きも、ぢっ♡」

今度は右を口で愛撫されながら、左は指で弄くられる。

時折カリッと爪で搔かれると面白いくらいに腰が跳ねた。

「あ、おおお……っ♡」

突き出した体勢で震える鼠径部に、ゴツツと何かが押し当てられた。腰を押し返されながら、私はふるふると体を震わせる。

それは熱くて、硬くて、ビクビクと脈打っていた。

「……はは。興奮、しすぎだろう？ 自分でもそう思う」

「あ、あ……♡♡」

彼が右手を下に持っていくと、今度は熱いものがにゆるんと、ぬれそぼった割れ目を擦った。小陰唇を開くように当てられた肉杭が、ぴったりと割れ目に密着している。

ぢゅるっ♡クリクリクリッ♡ぢゅるるるっ♡カリッ♡カリッ♡

「お、お……♡♡お、お♡♡♡まっで♡ちくび、まッ♡♡」

強かに吸われては尖らせた舌先で転がされ、前歯で噛まれる乳首。逞しいものでゾリユゾリユと擦られている秘裂はクリトリスごと揉みくちやにされていて。私はもう、限界寸前だった。

——タシッ♡

「——おッ!？」

すると不意に、クリトリスへ強烈な衝撃が走った。

タシツ♡タシツ♡タシツ♡……ガリツ♡

「あ、ひっ!? や、な、あああーッ!?」

クリトリスを熱いものに叩かれ、乳首を強めに噛まれて。私はあえなく絶頂に達した。

気持ち良すぎてわけが分からない中で跳き、それでもタシタシとクリトリスを叩かれる。

「フーッ♡ふく、ふう……っ!」

絶頂の余韻に浸るはずが、刺激が止まない。そのせいで私は目を白黒せながら、いきながらまたいくという初めての経験をした。

右側の乳首が円を描くように舌先で擦られ、反対側は引き伸ばされて指の腹で圧迫されている。

「っ、は……っ♡くっ♡」

タシタシタシッ♡コリコリッ♡タシッ♡

「あ、ふうっ♡♡う……っ！イッぐ！」

今も尚、しつこくクリトリスが叩かれていた。

乳首への責め苦も止まらず、快感が延々と脳を灼く。

跳ね上がった刺激を継続して与えられる私は耐えられずに、またしても達してしまった。

「はっ、あー……気持ちいい」

ぐちゅっ♡ぐちゅっ！ばちゅっ♡バチンッ♡

「や、やめ、おッ♡もう、やめ、おッ♡♡」

今になって漸く、立派な杭の先端でクリトリスを叩かれているのだと気付く。だがカウルさんはカウルさんで感じているようで、必死に厚い胸板を押しても全然止まってくれない。

それどころかグリグリと先端でクリトリスを擦られる始末だ。

「カウルさんっ、一回止まってえっ♡♡」

「ああ……、可愛いなアナスタシア」

「あ、んむうっ!？」

大きく開いた口が見えた瞬間——私は彼に食べられてしまうのだと、本能的に悟った。

けれど抵抗も出来ずに、そのままパクリと食べられてしまう。

「ん、ううっ♡ふ、はふっ♡お、お♡♡」

「ん……♡はあ、ぢゅるっ♡んー……♡」

荒々しく口内を舐め回される中で、私はずりゆずりゆと秘裂を擦られる。

逞しい幹はビキビキに怒張していて、ゴリゴリと割れ目を抉りながらも柔壁に包まれたさそうにしていた。

「まっ、へっ♡まら、んんむっ♡んーっ♡」

「はっ、はっ、んぢゅっ♡ぢゅっ♡ふはっ♡」

今すぐにも搦じ込まれてしまいそうな勢いに焦り、私はどうか止めようと言葉を紡ぐ。

しかし口内で暴れる舌は、私から話す自由を奪っていた。

「っ、すまない、握ってくれ」

「えっ？ひゃ……っ!？」

不意に口付けが解かれたと思えば、右手を取られた。そして手の平に、熱いものが押し当てられる。

握ってと頼まれたので反射的に握り込むが、力が強かったのかカウルさんはウツと呻いた。

鍛えているので私はそんじよそこらの女子供より、力があるのだ。

「あっ、ごめんなさい……!い、痛かったですよね？」

「っ、大丈夫、だ……っ」

カウルさんの大切な場所を傷付けたかもしれないと焦った私は、立派なものを両手で包んで優しく撫で擦る。

すると彼が出したもののか私が出したもののか判別は出来ないが、熱い剛直の全体が満遍なく潤った。

「ま、まてっ！もう、いい。ありがとう」

「あ……そう、ですか？」

左肩に触れられて正氣に戻った私は、丁寧に撫で回していた熱塊に視線を向け——そして、後悔した。

それはあまりにも——あまりにも。巨大で、太くて、長い。

そしてビキビキといきり立っていて、ガチガチに硬かった。

数年振りに致すには荷が重すぎる。ちょっと、立派すぎやしないか。物凄く熱いし。

私は戦略的撤退だと自分に言い聞かせて、そっとそれから手を離

した。けれどその手をカウルさんが取って、結局右手で握られる。私が呆気にとられているうちに、カウルさんはいそいそと私の右横を陣取った。

「触れていてくれ」

「は、はい……」

右脇腹の横に、折り畳まれた彼の膝がある。だから丁度良い場所に、ソレが聳え立っているのだ。

腕が辛いこともないので、私はカウルさんの望み通りに剛直を握り続けた。そして妙に冷静になってしまった私は、『握られていると安心するのかな？』なんて斜め上の予想をする。

しかし慌てて思考を振り払った。こんな状況でそんなわけはない。

「触れるぞ」

「……っ」

そっと右手で茂みを撫でられて、私はゴクリと生唾を飲み込んだ。その下にあるクリトリスは刺激の余韻でジリジリと焼け付くような疼きを発している。

彼が触れると言ったのはそこか、それともその下か。

どちらかは分からないけれど、これからその手で触れられると思うと、胸がドキドキとした。

「……はい。優しく、してください」

痛くして欲しいとねだったり、優しくしてと頼んだり。ワガママ放題な私の要望を、優しいカウルさんは笑顔で受け止めてくれる。

それどころか私の額に慈しむように口付けてくれるのだ。

僅かに香る彼の汗のにおい。決して嫌だと感じず、寧ろ癖になりそうだった。

「足を開けるか？」

「は、はい……」

私は照れながらも自ら開脚し、割れ目の中心を外気に曝した。

ぬれそぼった場所がヒンヤリとして、却って顔には熱が集まる。

（……あ、跳ねた）

右手で握っている剛直が、ピクンと跳ねる。そつと彼の顔を窺えば、角度的に見にくいだろうにじつと私の割れ目を見つめていた。

（ほんのりと目元が赤付いている……可愛い、かも）

私よりも七歳年上である男性に、『可愛い』は失礼にあたりそうだけれど。カウルさんは年の割りにとても若く見えるから、余計にそう思うのかもしれない。

「ん、……っ」

様子を窺いながらするりと幹を撫でると、黒い瞳がこちらを見た。ゆるりと口角を上げて、彼も私の中心に手を寄せる。

「あ、ん……！」

くるりと微かな力で、クリトリスが撫でられた。

彼の右手人差し指がそのまま、ゆるゆると皮被りの芽を撫でる。

「小さな芽が期待をして、ぷっくりと腫れているな」

「んんっ♡ん、ふうっ♡うう、言わない、でっ♡」

スリ、スリ……♡くちっ♡

私は甘く唇を吸われながら、柔くクリトリスを擦られる。

亀頭で叩かれていた時とは大違いだ。繊細なソフトタッチ。期待に膨張している陰核には、足りないくらいである。

「んん、んむ……っ♡はふっ♡あ、あっ♡」

——でも、気持ちがいい。クリトリスもそうだが、キスもうつとりしてしまうほど堪らない。

連続で達した余韻が残る体に与えられる刺激として、最適だった。

「カウル、さん……♡」

「ああ、可愛いなアナスタシア」

口付けは、とにかく優しい。

ちうつと唇を吸われて、ねつとりと口内を舐められていた。

クリトリスはぽてつとしている芽全体をスリスリと撫でられ、愛でられるほどに感度が上がっていく。

一切の不快感が無い甘い刺激の波。まるで適温のお湯に浸かるような心地好さに、私はうつとりと浸っていた。

（ちよつと強引なものもドキドキしたけど……こういうのも、安心してきていいな）

私は恍惚とした気分で、カウルさんの立派な杭を緩やかに撫でていた。その間も常に唇を合わせていて、ねつとりと口腔内に舌を這わされる。

どうやら彼は、キスが好きなようだ。

「……ンツ、んうつ♡」

甘い刺激に慣れ始めた頃。

私はキュツ♡とクリトリスを摘み上げられて、ビクンと腰を跳ねさせた。反らした喉に、かぷりと噛み付かれる。

「あ、あっ♡」

柔い肌に食い込む硬い感触。

痛くはないが、急所に噛み付かれている。だから私はその興奮でゾクゾクと体を震わせ、思考を白く霞ませた。

ぐりゅっ♡くちっ♡ぬりゅ……っ♡

「ふっ♡♡くうつ♡お、おお……っ♡」

「ん……。だめか」

摘ままれたクリトリスが、指の腹でにゅるんと滑った。

纏った蜜のせいで滑りやすくなっていたようだ。

想定外の強い刺激に、隘路がヒクンと蠢く。

——グリッ♡くりゅっ♡

「おッ!? おお、おッ♡♡」

カウルさんは摘まむことを諦めたのか、下から親指を当てるとグリッ♡とクリトリスを圧迫した。

皮の内側で芽が押し潰され、ぬるりと滑る。

「お、お、おっ♡♡♡♡」

「はは、凄い声だ♡」

くりゅっ♡くりゅ♡グリッ♡ごりゅっ♡

親指で強く押し潰されては、蜜濡れの芽が横に滑る。

その上で指を動かして芽を捏ねられれば、腰から下が溶けてなくなりそうなほどの膨大な快感が生じた。

彼の親指の方が淫芽より大きい。だから決して的外れず、いくら芽が横に逃げようとも、いとも簡単に捕まる。

「気持ちいいな、……アーシャ？」

「ふあっ!? あ、あっ♡んううっ♡♡」

不意打ちで愛称を呼ばれて。びっくりしたところでグリッ♡と強めにクリトリスを押し潰された。

強い刺激に目を閉じてビクビクと体を跳ねさせていれば、また唇で口を塞がれる。震える舌をねつとりと舐められるその合間に、私はまた「アーシャ」と彼に呼ばれた。

くりゅっ♡くちっ♡クリクリッ♡

「あ、あぁ……っ♡イツ、く……♡」

しつこくクリトリスを圧迫され、擦られて。

私は蓄積した熱を弾けさせようとお腹の奥に力を入れた。

「ああ。イツてくれ」

「んっ♡うあっ♡ハッ、はあっ♡」

「……っ、アーシャ？こら……っ」

小さいながらも膨張している芯を巧みに弄くられながら——私は右手を上下させて、カウルさんの剛直を擦っていた。

達する寸前だから、必死だ。けれどこのまま自分だけイき続けるのは、何だか嫌で。

パチパチと光が爆ぜる視界で黒い瞳を見つめながら、私は必死にシコシコ♡ごしごし♡と彼のものを扱っていた。

「カウル、さんっ♡はあ、カウルさんっ♡」

「く……！まて、そんなにしなくて、いいっ」

制止の合間にもクリクリッ♡とクリトリスを愛でられて、シコシコ♡と怒張を擦る。

もちろん余裕がなくとも、力加減には気を付けていた。

だから止められる謂れはない。

妙にムキになった私はムツとして至近距離から彼の瞳を見つめ、自ら顔を寄せて薄い唇を吸った。

「一緒に、イクン、ですっ！」

「いや、だがな、……っっ」

しゅっしゅっ♡くちゅっ♡ぢゅこぢゅこっ♡

子供の腕ほどはありそうな太い肉杭は、私の手の中で気持ち良さそうに跳ねている。

カウルさんは眉を顰めて悩ましげな表情を顔に浮かべ、暫し視線を泳がせた後、結局私に口付けた。

「ねっ？一緒に、イ……ッ♡あ、ああっ♡一緒に、いこっ？」

「っっっ」

唇を引っ付けたまま、甘えた声で話しかけて。そうして左手でツルリとした先端を撫でると、カウルさんは観念したように私の口に噛み付いた。

「ああ、アーシャ。アーシャ」

荒々しく口内に舌を這わされ、口付けの合間に名前を呼ばれる。

くりゅっ♡くりゅっ♡タシッ♡こりゅっ♡ピンピンッ♡

「ん、うう……っ！あッ、アッ！ああ〜っ♡♡♡」

そうしている最中にもクリトリスは責められていて、彼の指は擦るのではなく芯を弾いていた。

ぷっくりと腫れて育った芽は、多少強く刺激されても痛まない。

だから指先で左右に弾かれる度、大きな快感が生まれていた。

「イッく♡♡いくっ♡かうるしゃっ♡も、イクッ♡♡」

「ああっ、いいぞ♡イッてくれ……♡」

カウルさんはそう答えるなり、私の下唇を噛んだ。

ピンピンと弾かれ続けるクリトリス。

気持ちが良い。もつとしてほしい。

——でも。

「いっしょ♡♡いっしょがいいのおっ♡♡」

「……っ、はあ。かわいいな……」

ゴシユゴシユと立派な幹を擦り、なでなでと先端を撫で回す。

確かに熱塊は、気持ち良さそうに跳ねている。けれどまだ全然、達しそうにない。

私は黒い瞳をキツと睨み付け、早くイッてと囁いた。

「……一緒には、後でな」

にゅぐにゅぐっ♡——ぐりゅっ♡グググッ♡

「しょん、にゃっ——あああーっ♡♡♡♡」

クリトリスを押し潰されて摩擦され、私は達した。

まだ一緒には達せないことを誤魔化すために、強引に頂まで上らされてしまったのだ。

「はあっ、はあっ♡ずるいいっ♡」

「……はは、そうだな。ずるかったな？」

あやすように語りかけられて、ちうっ♡と優しく唇を吸われる。

その間にもクリトリスは親指に押されてくにくにと弄くられ、得も言えぬ快感に苛まれていた。

「一緒が、よかったのにいっ♡ふ、うっ♡」

くにくにくにゅ……♡入り口から蜜を救った太い指が、皮の上からクリトリスにマッサージをしている。

決定的な刺激でない。けれど達した直後に与えられる刺激にしては、些か強すぎた。

「今すぐには無理でも、後で必ず一緒にいくと約束する。だから今は許してくれ」

「うう……っ♡」

確かに未だに右手で握ったままのカウルさんのそれは、元気に跳ねているもののまだまだ限界は遠そうだ。

経験が少ないのでそう詳しいわけではないが、余裕を保っている彼の様子を見ていればそれくらいは分かる。

乱れていた彼の息も——テク無しの扱き上げに慣れてきたのか、整いつつあった。

「ほら、一緒にいくためにも中を拓こう。まずは一本から入れるかな」

「あ……♡は、はい♡」

カウルさんの右手がするりと茂みを撫でて、そのまま降りていく。

そしてぬちりと音を立て、指先が割れ目をなぞった。そのままくちくちと上下に擦られて、全身にじんわりと甘い快感が広がる。

「——あっ！」

遂に入り口に指が突き立てられて。くぷっ、と膣内に指が侵入した瞬間、私は大袈裟なほど驚いてしまった。どうやら久々に拓かれることに、思っていたよりも緊張していたようだ。

「アーシャ、力を抜け。大丈夫だ。ゆっくり進めるから」

「ふ、ふあい……♡」

しかし大きな手で優しく頭を撫でられて——単純な私は、トロント心を蕩けさせてしまった。

頭を撫でられながら、第一間接まで入った指で入り口の縁を擦られる。中を探るその手付きはとても慎重なもので、痛みもないため私はホッと安堵した。

顔に影がかかったと気付いた瞬間にはそつと唇に吸い付かれていて。私は過剰なまでに甘やかされながら、ゆるゆると彼の杭を抜く。

「あ、ん♡んん、んむっ、ンッ♡」

くちっ、くちっ♡……にゆるっ♡

熱い舌で歯列をなぞられながら、指を押し込まれた。

彼の指は太い。けれど先に何度か達したおかげで、久々の割には中がほぐれていた。

とは言え充分に拡張されているわけではない。

カウルさんの指は太く、蜜壺は狭い。きつと彼のものを受け入れるまでには、じつくりと時間をかけて広げなければならぬだろう。

「ゆっくり進めていこう」

「……はい」

もしかして私は今、物凄く情けない顔をしていたのだろうか。

ぺロリと私の唇を舐めたカウルさんは僅かに顔を上げ、私の額に口付けた。その間ずっと、彼は左手で私の頭を撫でている。

「ンッ、んっ、ふあっ♡」

「痛くないか？」

くちくちと控えめに中を擦られながら問いかけられて、私は無言でコクコクと頷いた。

本当に気を遣って、丁寧に進めてくれているのだろう。

痛みは微塵も無く、圧迫感はあるが——それはじんわりと苦しくて、気持ちが良いだけだった。

「アーシャ」

「はい、……んむっ」

名前を呼ばれて顔を上げると、またしても唇を奪われた。直ぐ様口内に舌が侵入し、内頬をねろねろと舐められる。

ぐぬ……っ♡ぐち、ぐち♡

「ん……っ！ふう、んあっ♡」

口付けにかまけていると、中に埋まったままの指が動き出す。
愛液の滑りを借りて、内壁を前後に擦っているのだ。

「……ここを押すと、どうだ？」

——グリユツ♡ぐち、ぐちっ♡

「——あッ♡はっ、ああ……っ♡」

「良さそうだな」

浅いところまで指を抜かれ、グチグチとGスポットを擦られる。
すると下腹部に重たい快感が蓄積し、私は居たたまれなさにそつと視線を逸らした。

「アーシャ？どうして目を逸らした」

「えっ？あ、んん……っ！」

ぐぢゅうつ♡グリ——ッ♡

険を孕んだ声で抗議され、強かに弱点を抉られる。更にはその場所をトントンと叩かれて、私の体はビクビクと勝手に跳ねていた。

「こっちを見るんだ」

「え、あっ？ あ、ふああっ♡」

Gスポットが気持ち良すぎて、視界がチカチカしている。けれど必死に黒い影を追って、私はどうにか鈍く光る黒い瞳を見つけた。それにしてもこんなことは初めてだ。自分は中で、感じにくいと思っていたのに——

「そうだ。俺を見ろ」

「あ、あっ、かうる、しゃんっ♡」

鼻先がぶつかるほど顔を寄せられて。私は指先で圧迫されたGスポットをグリグリと捏ねられながら、彼と至近距離で見つめ合う。

「……獣から視線を逸らすと、襲われてしまうぞ？」

「……っっ♡♡♡」

ベロリと唇を舐め上げられて、叱るように語りかけられる。

私の脳裏に映し出されたのは、真っ黒な魔獣の姿だ。

奴らも視線を逸らすと隙を見つけたとばかりに襲い掛かってくる。カウルさんも黒くて大きい。魔獣のように獰猛では無いが——そうなり得るとでも言いたいのだろうか。

「わかったな」

ゴリゴリ♡グリグリ♡ぐちゃぐちゃ♡

既に奥まで蕩けている蜜壺の、浅いところだけを責められている。

「は、い……っ♡」

そんな中で私はカウルさんと目を合わせ、しっかりと頷いた。

「あ……っ、んんっ♡」

するとすぐに唇へパクリと食らいつかれて、ちゅっ♡と吸われてから下唇を噛まれる。

どうやらカウルさんは、キスだけではなく目を合わせることも好きなようだ。意外と重い男なのかもしれない。

束縛されて逃げられないかもなんて——ゾクゾクしちゃう。

「いい子だ、アーシャ」

ぐちっ♡ぐりゅっ♡ぐちゅっ♡

「ン、ん♡あう、はあっ♡おおっ♡」

口内に舌を這わされ、優しく頭を撫でられながら。私は指の腹で集中的にGスポットを抉られ、度々息を詰める。

「あんん………！」

「………ははっ」

ぐ、ちゅう……♡と太い指が奥まで入り込み、指先が深いところ

の壁を撫でる。

感覚が鈍いところ、鋭いところ――

感じるところがあれば、感じないところもある。それを手探りで見極め、カウルさんは次第に私の弱点を見極めていった。

「ここを擦ると、……ああ。うねりがすごいな」

「う、う、うゝゝっ♡♡」

カウルさんは今、奥にある私の弱いところをぐちゅぐちゅと集中的に擦っている。

その上で優しく頬に口付けてきて。力が抜けていた私の右手を取ると、再び剛直を握らせた。

「きちんと握っていないとだめだろう？」

ぐちゅぐちゅっ♡ぐちっ♡ぬちぬちっ♡

「はっ、あっ♡あ、んううっ♡♡おおゝっ♡」

そうは言っても——私が手を離していてもそれは天に向かって起立しているし、擦っても全然達しそうにない。

でも握れと言われると、握るしかないのだ。

私は剛直を右手に持ったまま、しつこい責め立てにガクガクと腰を跳ねさせていた。

彼の指先が内壁の弱いところを捉えて離さない。だから気持ちが良いくて堪らない。

「んんんっ♡そこ、もういやあっ♡」

私が弱音を吐いてかぶりを振れば、カウルさんはクツクツと喉で笑った。そして指を突き入れる角度を変えて、指の根本付近でググツとGスポットを押す。

「じゃあこっちか？」

「あっ、あっ！そこもおっ♡♡♡」

グリグリ♡ゴリゴリ♡と浅いところの弱点を髑られて、それはそれで感じてしまう。

だから私は再度首を横に振って、嫌だと主張した。

「これもだめ？」

「っ、んっ！だめっ」

駄目かと聞かれて駄目だと返したのに、グチグチグチツ♡としつこくGスポットを責められる。

私は必死にイヤイヤとかぶりを振るが、それに対して返されたのは忍び笑いだけだった。

「アーシャ、ならこれは？」

「え？なに……？」

名前を呼ばれて、パチリと目を瞬かせて。そうして私が見つめた視線の先で、カウルさんがにっこりと笑った。

——くにゅっ♡

「……おッ♡♡♡♡」

不意にクリトリスへ、強烈な快感が走った。遅れて親指で押し潰されたのだと気付いたが、すぐに思考が霧散する。

「や、やっ♡あ、ううゝっ♡♡」

「はは、随分と良さそうだな？」

クチクチクチッ♡前後に素早く擦られるクリトリスが気持ちいい。それどころか膣内の快感と外側の快感が繋がっている。

「あっ、あっ、あ……っ！」

クリトリスが気持ちいいのは当然だが、その感覚に膣内も引っ張られてしまい——つまりは身に受ける快感が格段に跳ね上がってしまった。

「ん……♡」

「んっ、んうっ♡ふうっ♡ンンッ♡」

唇を吸われ、ねっとり舐められながら。

私はグチグチと蜜壺の中を掻き混ぜられる。

奥まったところから、浅いところまで。膣内がどこもかしこも気持ち良くて、擦られているクリトリスもまた悦い。

「あ、イ……ッ！」

「ああ、イッてくれ」

グリグリ♡と指の根本でGスポットを圧迫されている内に、頂の目前まで性感が高まった。最奥のビリビリする場所をしつこく撫でられて、脳内がが真っ白に染まる。

「あ、あっ、あゝッ♡♡」

クリトリスも物凄くイイ。だから私はあっさりと達してしまった。大きな波に飲まれ、膣奥からぶわりと熱い感覚が広がる。

指を咥え込んだままの蜜壺は、ヒクヒクと切なく戦慄していた。

「上手にイけたな。いい子だ」

ぐちゅっ♡グチッ♡ごりゅっ♡グリグリッ♡

「あ、あんっ♡ふあぁっ♡あー……っ♡♡」

またしても頭を撫でて甘やかされながら、尚も膣内を愛でられる。クリトリスも苛烈に責められていて、お腹の中の収縮が治まらな
い。

「だめっ♡もうだめえっ♡♡」

駄目と繰り返しても止めてもらえず——それにどうしようもなく興奮する。

本当は、止めてほしくない。イきすぎて辛いけど、本心ではもっと手酷くいたぶってほしいと思っていた。

「まだイけるだろう？」

「も、むりいっ♡♡」

ぐっちょぐっちょとはしたない音を立てながら、しつこく膣内を
攪拌される。

サディストな返答と止まらない愛撫。慈しむように頭を撫でる手。
頬や額に落とされる口付け。ああ、何もかもが完璧だ。

気持ち良くて、苦しくて、ときめいて。たまらない。

「……ああ、足りないなら指を増やしてやろうか」

「あ、ああっ♡♡やらっ、ふぁッ♡♡」

ずるるッ♡と引かれた指が、私の声を見捨てて全て抜かれてしま
った。そうして改めて入り口に当てられたのは、太くなった指の束。
ぬちぬちと入り口を擦って、今にも入り込もうとしている。

ゾクゾク、ドキドキ。嫌とやだを繰り返す口とは裏腹に、鼓動は
期待で跳ねていた。

「だめっ♡かうるしゃ、ねえっ♡♡♡♡」

「……可愛いなあ、アーシャ」

きつと、わざと拒絶の言葉を繰り返していると——気付かれていたのだろう。

獰猛に笑ったカウルさんは私の鼻先をかぷりと噛んで。驚いて私がキョトンと目を丸めた瞬間、ずぶりと蜜口に指を突き入れた。

「あっ、ああっ！ ああーっ♡♡」

「キツい、が……入りそうだな」

ゴリゴリと内壁を抉りながら、二本の束が突き進む。

駄目と言ったのに、結局挿入されてしまった。

しかも太くなった侵入者は、遠慮無くズブズブと入り込んでくる。

「ふっ、ふといっ♡♡ふとおっ♡」

「頑張れ頑張れ♡」

明るく励ましてくれる反面、指の進行は容赦がない。

カウルさん是不慣れな蜜道を果敢に掻き分け、内側のひだを抉る。苦しくて、ちよつとキツい。それなのに私の体は苦痛を快樂として認識し、大人しく指を受け入れていくばかりだ。

——やがて指先が、コツンと行き止まりに到達する。

「あえっ♡♡ふ、ふかい……っ♡」

「そうだな。一番奥まで入ったな♡」

以前自分で指を入れてみた時は、ここまで奥に入らなかった。

太さだけではなく長さもある彼の指は、緩く前後してねぢねぢと隘路を擦る。

「お、おっ!? お、おっ♡♡♡」

「はは、ここが好きか」

カリカリ♡と行き止まりを指先で搔かれて、私は凄まじい衝撃に

目を白黒させた。

お腹の奥からやってきたのは、大きな快樂の波。

にゅぐにゅぐ♡グチグチ♡カリカリ♡と隘路を擦られ、行き止まりを搔かれる度、ビクビクと内腿が痙攣した。

「イツ、く♡いくっ♡イ、ぐう♡♡」

「ああ。好きなだけイけ」

指一本でも太くて、気持ちがよかった。けれど今みたいにもっと太くて、ほんのりと苦しい方が——やっぱり私は好きみたいだ。

だからキツイくらいの刺激を与えられて、私は即座に達しそうになっっていた。

「ほら、もっとしてやる。クリもだ」

ぐぢゅぐぢゅぐぢゅっ♡くりゅくりゅっ♡

「お、お、お……♡いぐう♡♡い、ぐっ♡」

彼は右手でじゅぽじゅぽ♡と指を抜き挿し、左手では摘まんだクリトリスをにゅこにゅこ♡と扱く。

膣内はどこもかしこもイイところが擦れ、たまに行き止まりを力リカリ♡と搔かれていた。

クリトリスは皮コキをされていたはずが、人差し指と薬指を使つて皮を剥かれて。そのまま固定され、中指で執拗に捏ねられる。

「あ、い、いっくうっ♡♡♡」

とにもかくにも気持ちがよくて。

私は苛烈にGスポットをゴリゴリされながら、達してしまった。

ぐちゅぐちゅっ！コリコリコリッ♡ゴリユッ♡ずりゆりゅっ♡

「あ、ひ……っ！おおっ！イッだ♡もう、いきまひたあっ！」

「そうだな。もう、イッたな♡」

見たことが無いほどにニコニコと笑っているカウルさんが、私の

額に口付ける。

けれど彼の両手は、執拗に私の性感帯を嬲り続けていた。

「イツく……！また、いくからあつ！」

「はは、それがどうした？思う存分、イけばいいだろう？」

ぐちぐち♡ごりゅごりゅ♡指で内壁を擦りながらも指先は奥にあるイイ場所を執拗に狙い続けている。

「くりっ♡きちゅいのお……ッ♡♡」

「そうだな♡我慢せずにイツてくれ♡」

にゅぐにゅぐっ♡タシタシッ♡

芯を直接擦られているクリトリスは揉みくちやにされ、細かく何度もタツピングをされている。

その度に腰が跳ねていきそうになっているのに、カウルさんは気にせず愛撫を続ける。

——いいや気にしていないわけではない。
全力で、私をイかせようとしているのだ。

「イ、く……！また、いつぐう……！おおーッ！」

「ああ、イけ。何度だって俺の手でいくんだ」

ごちゅごちゅごちゅっ♡曲げた指でGスポットがめちゃくちやに
嬲られて。クリトリスが中指の腹でコリコリコリッ♡と捏ねられて。
またしても私は達してしまった。

けれどそれでも、責め苦は止まない。

「おっっッ♡♡お、おっっ♡も、むりれしゅうつ♡♡♡」

「そんなことはないさ。アーシャはもつとイける。そうだろう？」
力み過ぎてギュンギュンと締まっている膣内で、太い指が縦横無
尽に動き回っている。

あっちもこっちも弱点が抉られていて。気持ち良すぎて頭が馬鹿

になる。

にゅぐにゅぐにゅぐっ♡ぐちぐちっ♡

「クリッ♡しにゅっ♡おツツ♡♡」

クリトリスは勃起し過ぎているせいで、今では支えられなくとも剥けたままになっていた。

その剥き出しになった芯を摘ままれ、シコシコ♡と扱かれている。私はたまらずその下からビシャッ♡と透明な液体を吹き出すのが、カウルさんは喉で低く笑うだけで責める手管を少しも緩めなかった。ただ額や鼻先に、優しい口付けが落とされている。

「イック♡いく、いくっ♡イ……ッ！」

外も中も延々と刺激を与えられて、私は思考を真っ白に染め上げたままグルンと眼球を上向けた。

気持ちいい。いき過ぎて息が苦しいが、それもまた最高に気持ち

がイイ。気持ち良すぎて辛いためどうにか抵抗したいが、体に力が入らない。

「い、く……♡」

ごりゅごりゅ♡ぶちやぶちやつ！

ぶちゅっ♡ごりゅっ♡グリグリグリッ♡

耳につくのは、そんな酷い音ばかり。

真っ暗な世界の中で私は激しい水音と荒い自分の呼吸音、そして低く笑う色っぽい男性の声だけを耳にする。

——グリッ！ごりゅごりゅごりゅ！

「——お、ほ、おお……ッ♡♡♡」

強くクリトリスを押し潰されて揺さぶられ、Gスポットが無理矢理イかせようとするかのように捻り潰される。

たまらずプシッと透明の液体を吹いて達すれば、ブヂュヂュッ♡

と音を立てながら根本まで指を挿じ込まれ、行き止まりをカリカリ♡と搔かれた。

「アーシヤはイクのが上手だな？ イイコ、イイコ……♡」

「ひっ、ひいっ♡ひ、く……っ♡」

イき過ぎて苦しくて、苦しいのが気持ち良くて。

私は呆然とイきまくりながら、ただ淫らに腰を揺らしていた。

隘路に対して指の束のサイズがぴったりだから、指が前後する度に内壁が容赦なく擦れる。

「もっともっと、俺の手でイこうな」

「ふぁ、い……♡イキ、ましゅ……♡」

クリ責めも、おまんこ責めも終わりが見えない。

けれど私はだらしなく足を開いて、ただヘラヘラと笑っていた。

——しかし同じ刺激を与えられていれば、やがて慣れていくもの

だ。それから十分ほどが経てば、私はビクビクと体を痙攣させるだけ
けで大きくいくことはなくなった。

「よし、アプローチを変えるか」

「あ……？」

目を閉じてボロボロと生理的な涙を流していた私は、マツトレス
の傾きを感じて顔を上げる。けれどあると思っていた場所に、カウ
ルさんの顔はなかった。

ズリュツ♡——ズチチチツ♡

「お、あううつ♡♡♡おーっ♡♡♡」

瞬きを繰り返しながらどこに言ったのだろうと考えていると、体
に衝撃が走る。未だに根本まで埋まっていた二本のが無遠慮に引か
れ、チュポンツ♡と可愛い音を立てて引き抜かれたのだ。

「お、お、おお……♡」

私はゴリゴリと内壁を擦られた感覚に白目を剥き、たつぷりと愛でられた隘路をヒクヒクと震わせる。

シヨロツ♡と尿道口から溢れ出したものは果たして潮か、尿か。どちらかは分からないが、とにかく気持ちよすぎて出てしまったのは確かだった。

「あ、あ、あに……？」

太ももが持ち上げられて、ギチツ♡と拘束されている。私はその感覚にパチパチと目を瞬かせ、ゆっくりと頭を持ち上げた。

「あえ……？」

「ん……♡」

ちゅ、ちゅ……♡

ぼんやりと見下ろした先では——カウルさんが両手でガツチリと私の太ももを抱え、恥丘に口付けていた。

茂みの上に口付けられる感覚はちよつとだけ攪つたい。私はたまらずもぞもぞと腰を揺らした。

——けれど太ももをホールドされていて、殆んど動けない。

「あの、かうるさん……？」

「ん、ん……♡」

いきすぎてぼーっとしてしている頭では未だに状況が飲み込めなくて。私はぼんやりと黒い頭を見つめたまま、首を傾げた。

けれど顔を上げているのも何だか辛い。だから私はすぐに脱力してしまつて、シーツの上に頭を下ろした。

——ぢゅるんっ♡

「——あひッ!？」

しかし私が体から力を抜いた瞬間。クリトリスに凄まじい快感が走った。

私はハッ、ハッと短く息を吐き出し、目を剥いて天井を見つめる。
何が起きた。何が起きた？ 今、何をされて――

ぢゅっ♡ぢゅるっ♡にぢにぢにぢっ♡

「あ、あ、あひ……っ♡♡♡おっ♡」

熱くてしっとりとした空間に包まれたクリトリスが、密着する軟
体動物めいた物にゴリゴリと挟られている。想像を絶する快感に脳
内が真っ白に染まり、私はハクハクと唇を開閉させていた。

「ん、ん、んっ♡……はっ、ふっ♡」

「お、お、お、おー……っ♡」

ぢゅぱぢゅぱと酷い音が鳴る度、クリトリスがとてつもなく気持ち
よくなる。

ガチンと固まった私の体は跳ねるだけで、まともに動かなかった。
よって刺激から逃れることは出来ない。

引き伸ばされたり離されたりする感覚から、どうやらクリトリスを吸引されているようだ。

それならゴリゴリと皮の下にある芯を抉っているのは彼の舌で。ぬるぬると芯を擦りながら吸い上げてくるのは彼の唇で――

「あ、まっ、てっ♡おねが……っ、ねえっ！」

「ふふ、はあっ♡んっ、んっ♡」

蜜口を抉るように擦っているのは、彼の指だろう。

問題は全ての刺激があまりにも悦すぎて、それでいて当てられている指先が先ほどまで太い束になっていることだ。

きつと、三本だ。そう察して止めてと頼んでも。そして必死に顔を上げて視線で訴えかけても。

黒曜石の瞳はゆるりと笑んで、私のことを見つめ続けるだけだ。

決して、譲歩してはくれない。

ぢゅるっ♡ぢゅるるっ♡——ぐぶっ♡にゅぐぐぶっ♡

「あっ♡ああっ♡クリ、きも……あぁあっ♡♡」

あまりにもクリトリスが気持ち良すぎてその良さに浸っていると、隙を見つけたとばかりに指先が突き入れられた。

「お、お、おおっ！おッ♡♡」

ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡ぢゅぢゅっ♡

これまで以上に大きな異物に意識を集中的したいのに、唇で吸われ、舌で弾かれるクリトリスのせいでそちらに意識を持っていける。

「まってっ♡ねえ、おっおーッ！」

ぢゅ、ぢゅぢゅッ♡♡

ギチギチと中を押し広げていく感覚に息を乱し、必死に訴えかけるのに。黙らせるかのように思いつ切りクリトリスを吸い上げられ

て、脳内が気持ちいいでいっぱいになった。

「ふーっ♡ふう、ぐっ、……っ♡」

にゅぢっ♡ぐぢゅっ♡コリコリッ♡

「あ、あひっ♡ひいっ♡おっおッ！」

ドンドンと振じ込まれる太い指の束と、それを誤魔化すようにめちやくちやに責められるクリトリス。

強すぎる快感と圧迫感で私の思考はグチャグチャになり、訳も分からず体が達しようとしていた。

「ごべんなしやいっ♡♡ごめ、なしや——あぁいっくう……!!」

やめても駄目も意味がないならと、必死に謝って。カリッ♡と前歯で直接芯を噛まれた瞬間、ドクンッと大きく鼓動が跳ねた。

「あああゝッ♡♡♡」

プシヤッ♡とスプラッシュ。

そしてグネグネとうねり、それでも苛烈に蹂躪される隘路。

「ん……♡ぢゅぞぞぞっ♡ぢゅるるっ！」

——ずぢゅっ！グチグチグチッ！にゅぐっ♡

「おッ♡お、ほ♡♡おッ！おーッ！」

クリトリスを口でもみくちやにされながら、三本の指を根本まで振じ込まれる。奥に指先が当たるなり狭い蜜道をごちゅごちゅと激しく擦られて、私は意味も分からず連続で達し続けた。

「はっはあっ♡れるれるっ♡ぢゅぢゅーっ♡ふっ、ぢゅるるっ♡」
ぶちゅっ♡ぶちゅっ♡ごりゅっ♡カリッ♡

「お、お、お……ッ♡ほお、お、お♡♡♡」

尖らせた舌先でクリトリスを押し潰されては擦られ、それからまた強かに吸われる。膣内は三本の指でじゅぽじゅぽと前後に擦られ、行き止まりをカリカリと搔かれていた。

「あ……っ♡ふぎっ！」

今度はクニ、と優しく食まれた芯に——ゆっくりと歯の表面が食い込む。

ビリビリとした刺激が脳に直撃して。私は涙で濡れた視界をブレさせながら、ギリツと歯を食い縛った。

ぼちゅぼちゅっ！ゴリツ！ゴリツ！

「フーツ、フーツ！ふぐっ♡ういッ♡♡」

クリトリスを噛まれながら膣内を執拗に耕され、三本にも慣れてきたと判断されたのか彼の手首が捻られる。

（きついきついきつい……！）

回転する指の束が膣壁を容赦なくこそぎ、浅いところから深いところまで満遍なく摩擦する。

その刺激は苦しくて気持ち良くて。私は歯を食い縛ってチラチラ

と目を上向けながら、為す術も無く何度も達し続けていた。

「はーっ、はーっ、アーシャ……♡」

ずちゅずちゅっ！ごりゅうつ！ぶちゅっ！

（イク！イクイクッ！いくう！うッ♡♡♡）

もう声も出ないから、私は必死に心の中で叫ぶ。

イツてもイツても彼の指は私の中を蹂躪し続け、のたうつ拍子に見えた太い腕は力が入って血管が浮き出していた。

コリコリコリッ♡ぐにゅ……♡

「……ッ♡♡♡……ッ!!♡♡」

回転する指の束をぼっちゅぼっちゅと打ち込まれ、強かにクリトリスを噛まれた瞬間。

私は全てを真っ白に染め上げて、大きく口を開け放った。

「……ああ、すごいな……♡大噴出だ……♡」

「……ッ♡♡っっ、っ！」

白かった世界が黒に変わり、また白へと移り変わる。

そんな中で私はねつとりとクリトリスを舐め上げられ、熱い尿道口にも丁寧な舌を這わされた。

ゴク、ゴクと。喉が鳴る音が聞こえている。

けれどもういい。何でもいい。

気持ちいい。気持ちが——いい。

「あ、は、あ……♡」

私は太いものでねちねちと膣内の奥の奥まで擦られながら、へらりと笑った。

イき過ぎて辛くて気持ちいい。酸欠状態で苦しくて気持ちいい。

足がホールドされていて動けなくて嬉しい。もつといじめてほしい。もつと酷くいたぶってほしい。

誰かさんが言っていた通り私はエムつけがあって、それでいてカウルさんとの相性がぴったりのだろう。

だからこそ彼は恍惚とした表情で、私のおまんこを舐めている。

「……ふう」

「あゝおゝおッ♡♡♡」

顔を上げたカウルさんが、にゅぶぶぶっ♡と私の中から指を引き抜いた。にゅぽんっ♡と抜かれた指を恋しがって、入り口がヒクヒクと開閉を繰り返す。

「そろそろ挿れるぞ」

「あ、……ふぁい♡♡」

のそりと起き上がったカウルさんに覆い被さられた私は、へらへらと笑いながら彼の首に腕を絡めた。

足の裏が宙に浮き、腰の位置が合うようにと調整される。

「あっ♡おっきいの、あたってる♡♡」

「……はは、そうだな。当てているからな」

ピタリと入り口に押し当てられたのは巨大な杭。どんなに太くとも指の束など序の口であっただと思えるほどの、凄まじい大きさだ。

強引に押し込まれれば、裂けてしまうかもしれない。

そんなことを考えて、私はゾクゾクとしていた。

「そうだ。後で俺が避妊薬を手配するから、その点は心配しなくて
も——」

「はやくうつ♡カウルさん、根本まで一気に押し込んで……！」

あと一押しで挿入が叶う瞬間に、何事かをっらっらと言っていたから。私はグイッと彼の頭を引き寄せて、自ら割れ目を剛直に押し付けた。

「まっ、待て。いきなりは傷付け……！」

——にゅぶっ♡ぐぽおッ♡

「お……っ！おっ、きいッ♡♡」

大きな熱塊が入り口をグパリと押し広げている。あまりにも大きすぎる異物に膣内はギュンギュンと締めまり、蠢いていた。

「……くっ、どうなっても知らない、ぞ……！」

「あ……っ♡」

挿入した瞬間には動きを止めていたカウルさんだったが、どうやら吹っ切れた様子だ。

私の腰を右手で掴むとグツと自分に引き寄せ、結合を深めた。

ぐちちち……っ♡にゅぐぐ……♡ぐぶっ♡

「あ、あーッ！あ、はいつてくるうっ♡♡」

「……っ♡ふ、キツ……っ♡」

蜜道のひだをゴリゴリとこそぎながら侵入する立派な肉杭。

それは火傷しそうなほどに熱くて、ずっしりとしていた。

確かな質量をしてミツチリと肉が詰まっているから、ヒクヒクと震える内壁の収縮にも押し負けない。

（おなか、重い……！）

まだ先端がちよっと突き刺さっているだけなのに。

極太の杭のせいで下腹部が重たく感じる。

しかし彼に火を着けてしまったのは他ならぬ私だ。

心と体が大きすぎると今更怯んでも、ミチミチの内壁は容赦無く押し広げられ、ズリズリと擦られる。

そうして私は着実に、剛直で奥まで開拓されていた。

——ぐりゅんっ！ぬちぢっ♡

「——おッ♡♡♡おお♡♡♡」

「っっ、くう……っ♡」

巨大な先端に、Gスポットが押し潰された。

一気に膨れ上がった快感。

私が見開いて愕然としていると、確かめるように往復されて
ゴリユツ♡ゴリユツ♡とそこを擦られる。

「……ふ、アーシヤが大好きなここ、物凄く腫れているぞ♡」

「ひッ！や、あッ！やめ、おっおッ♡♡♡」

「はは、擦り甲斐があつて、滾る♡♡」

ゴリユツ♡ぐちゅっ♡ゴリユツ♡

腰を押し付けられるとGスポットが肉杭のツルリとした先端で強
かに押し潰され、括れたカリ首でも擦られる。

それから腰を引かれると反対の動きでクリトリスの裏側が擦られ、
夥しい量の快感を生んだ。

「はあ、はあ、貪欲に、食らい付いてきている……！！アーシヤのこ

こは、とっても欲しがりみたいだなっ♡♡」

ぶちゅっ♡ゴチュッ♡ずちゅっ♡ゴリュッ♡ずりゅうつ♡♡

「お、ぎもぢっ♡♡おまんこ、そこ、しゅごい、いい……っ！」

前後に往復する剛直でしつこくGスポットを研磨され、多量に分泌された愛液が酷い音を立てて泡立てられる。

何度そこを擦られても気持ち良くて、どんどんと熱が蓄積している私のお腹は、じんわりと鈍くて熱い痺れを発していた。

「ぐ、うう〜っ♡♡♡うーっ♡♡」

ゴリュッ♡ぶちゅっ♡ごりゅりゅっ♡

蜜道の許容範囲を超えているのに、浅いところで力強く前後するおちんちん。圧迫感があって苦しいのに、性感帯を文字通り嬲られているせいで快感が勝っていた。

「あ、おおっ♡じゅーしゅぽ、すごおお♡♡」

「はっ、ああっ♡俺もザラザラで先端が擦れて、いい♡♡」

ゾクゾクしている奥を無視して、カウルさんは執拗にGスポットばかりを責め続ける。

彼が口走った通り、敏感な場所をザラついた壁に擦られるのがたまらないのだろう。巧みに腰を使うカウルさんはグポグポと膣穴を耕し、悩ましげな息を吐いていた。

「あー……、いい……♡」

ずっちゅ♡ずっちゅ♡ごぢゅっ♡

「う、あう、おおっ♡♡」

今や素早く振りたくられているカウルさんの腰は、たまに勢い余ってブンッ！と前に突き出される。その度にお腹の奥にはズンッ！と強い衝撃が走り、私は視界をチカチカさせていた。

「キツくて、トロトロで、熱くて♡よく、絡み付く♡」

ごりゅっ♡ぶちゅっ♡ずちゅっ♡

「う、うーっ♡♡うあ、ああーっ♡♡」

快感によわよわなGスポットを必ず擦りながら、カウルさんは少しずつ剛直で擦る範囲を広げていった。

「っ、はーっ♡あー、気持ちいい……♡」

ぐじゅっ♡ずろろっ♡……ズンッ！ずちちっ♡ズリュッ♡

「ふーっ♡ふーっ♡お、おッくるし……っ♡おッ！」

綺麗に割れた腹筋が少しずつだが着実に、こちらに近付いて来ている。

カウルさんのおちんちんは本当に大きくて。お腹の中はミツチミチで、余分なスペースなど微塵も無い。

——いやそれどころか、容量オーバーになって彼の形に拡張されていた。

それでもズンズンと怒張は突き進んで、包み込む蜜壺をもっとふかふかにしようと耕す。

「ふっ、くっ、はあっ♡ふっ、ふっ、ふっ♡」

ズリュツ！ぐちゅっ♡ずりゅずりゅずりゅツ！ぶちゅっ♡

「ひっ、あっ、あぁ……！はげしっ♡はげしいっ♡♡♡」

それはただ太いだけじゃなくて、恐ろしく長いから。カウルさんは澆刺と汗を掻きながら、大きなスラストで律動を繰り返す。

チラリと見た感じまだ半分しか埋まってないのに、蜜道はもう既にほとんどが満たされていた。それなのに限界まで拡張された膣内が、めちゃくちやに擦られている。

「はっ、はっ、よしっ♡いくぞっ♡」

——ずちゅっ♡ずろろろっ♡♡♡

「……あッ!? ふあああっ♡♡♡」

しかし不意に、カウルさんが私の腰を掴んで。思いつき腰を引くと、それに大きく喘いでいる私を置き去りにして狙いを定めた。

「それ……っ！」

——ゾリユゾリユツ！ぶぢゅぢゅ……ごっちゅん！

「お、おッ、おーッ！あ、おーっ♡♡♡あ、い……ッ!!」

押し潰すようにGスポットが抉られたと思ったら、一気にバチュンッ！と行き止まりに先端を叩き付けられた。

めちゃくちなな衝撃を与えた怒張は、それでも変わらずグイグイと先端を押し付けてくる。

「くっ、行き止まりか……っ♡だめだ、もっと奥まで……っ♡」

グッ♡ググッ♡ゴツッ♡ごちゅんっ♡グリグリグリッ♡

「ひぎっ♡♡あぐっ♡♡お、きちゅっ♡♡♡これえっ♡♡お、お

おー……♡」

もつと言っているから、きつと根本までは入っていない。

けれど私のおまんこはもう、限界で。ヒクヒクと震えて快感を極め、余韻でうねる内壁を使って剛直を舐めていた。

「おっつきい♡♡おっ、き、しゅぎいっ♡♡♡」

本当に、びっくりするくらいに大きい。

腰を引かれれば内壁が少し付いていってしまうほどで、おまんこの中には全く余裕が無かった。

「アーシャ、どうした？きちんと根本まで飲み込まないと駄目だろう？うん？」

ごっちゅ♡ごっちゅ♡ゴツンツ♡ぶちゅっ♡

「ひあああゝ……っ♡♡あ、おっおっ♡♡」

集中的に行き止まりをノックされて、子宮を揺さぶられる。

胎内に直接走る快感は凄まじく、あまりの気持ちよさに私はプシ

ッ♡と粗相をしてしまった。

「お、ぎもぢいい♡♡……ヒッ♡♡い、ぐ♡♡♡」

延々と行き止まりを突き上げられ、ピッタリサイズどころか過剰サイズの杭で膣穴全体を苛烈に擦り上げられる。

「いぐいぐいっぐ♡♡」

おかげで私の体は馬鹿になって、連続で達していた。

それでも太く逞しい怒張は淀みなく前後運動を繰り返し、引き伸ばされた内壁を隅々まで丁寧に磨き上げていく。

「アーシャ？どうして自分だけイき続けているんだ。一緒にイクんじゃないなかったのか？なあ♡」

「う、うつ♡でもお……！あッ、いぐう……!!」

言葉で私を詰るカウルさんは、その間にも力強く腰を打ち付けてきていた。

ごちゅごちゅゴンゴンとお腹の奥がノックされて。衝撃が強くて苦しいくらいなのに、それよりも遥かに気持ちいい。

「ふっ、ふうっ♡クッ、はあっ♡」

ぶちゅぶちゅぶちゅ！ごちゅ、ごちゅっ！

「お、おイツぐうううッ♡♡♡」

いつの間にしゃがみこむ体勢になっていたカウルさんは、私の両足を掴んだ体勢でブンブンと腰を振りたくっている。

またしてもイツてしまった私に対して、彼は息こそ乱しているが全然余裕そうだ。

まるで運動で汗を流すかのような快活さで、私を犯している。

「まっでえ！いっかいっ、まッッ♡♡」

ゴリゴリ♡ゾリゾリッ♡ズリュッ♡ずちちちっ♡

ギンギンに滾っている剛直が、容赦無く内壁を擦る。

肉ひだのひとつひとつがめちゃくちゃに捏ねられていて、私のお腹の中では甘ったるくて重い快樂が渦巻いていた。

蓄積した熱が、少しずつ子宮に押し寄せてくる。

「はは、まるで食むように食い付いてくるっ♡はっ、はっ♡腰が、止まらないっ♡」

「う、ああ……ッ！ひ、うぐっ♡♡」

ズンズンと力強く突き入れられる怒張の、エラが張った括れ部分。そこがイイところばかりを擦る。

行き止まりをノックする力は確かに強いが、カウルさんは今こうしている間にも調整をしているのか、僅かにあつた苦痛は次第に薄れていった。

ずちゅっ♡ごちゅっ♡ぶちゅっ♡

「あ、いく……っ♡♡いっ♡♡♡」

つまり今では、的確な力加減と速度で、最奥を突かれているということだ。その他の弱点もピンポイントで狙い打ちされ、私は為す術なくイき続ける。

「まっ、てっ♡これ、気持ち良すぎるう……！」

「ああ、何度だってイかせてやる♡それこそ、イきすぎて辛いって泣くほどに……！」

きちんと有言実行するとばかりに息巻いて、カウルさんはズンズンと力強く私の中を穿つ。

幹に擦られ続ける蜜道ではふたり分の体液が泡立ち、入り口からトロトロと溢れ出していた。

「ほら、イけ♡イけっ♡俺のちんぽで犯されて、イっけ♡♡」
ズリュッ♡ドチュンッ！ごりゅッ、ぶぢゅっ♡どちゅっ！

「あッ♡♡おちんぽ、つよっ♡♡お、あゝおゝッ♡♡♡♡」

素早く抜き挿しされる怒張が最奥に先端を叩き付け、子宮を押し上げる。凄まじい快感と衝撃に私は体を硬直させ、強く怒張を締め付けた。

「もつとだ♡もつと、イケっ♡イケイケイケ……！」

「おぉッ！おーッ！イグッ！いぐう!!」

激しく振りたくられ、叩き付けられる腰。

余っている根本部分を戻し込もうとするような苛烈さで責め立てられているのに、私の体は簡単に絶頂を重ねる。

「ぐッ、いっ♡♡ひぐっ♡♡ほ、おっ♡♡あええ……っ♡」

ぶちゅぶちゅぶちゅ♡ぷしゃっ♡ズンッ！ズンッ！ぷしゃっ♡おっきくて硬くて、おまんこを犯すのが上手なおちんちん。

私の体は完全に屈服し、何度も連続で絶頂を重ねながら度々派手に潮を吹く。

「がんばれ、アーシャ♡♡イクイク♡ほら、っ、イク♡♡」

「♡♡♡!! い、いくぅ……♡♡♡お♡♡♡」

強烈な快感で脳を灼かれ、いきすぎて馬鹿になった蜜壺を尚も耕される。ぷりぷりの肉ひだやGスポットが抉られる。

私がどんなに濁った嬌声上げ、どんなに酷いいき方をしてても。

容赦なくピストンは繰り返され、押し上げられた子宮はひしゃげる。潮を吹いても、止まらない。

「イけ、もつとだ。もつとイけ」

「ひぎゅッ——」

右耳の傍で低く命令され、奇妙な声を上げて。思考も脳内も真っ白に染め上げた私は、白目を剥きながら失禁を果たす。体液が泡立っては掻き出される蜜口を、温かな液体が撫でていった。

「あ、え、お……♡」

ズンズンぶちやぶちやゴツゴツ。

器用に感じるところばかりを擦って、押し上げて、抉って。カウルさんは勢いが衰えることの無いピストンを繰り返す。

——いいや、衰えるどころの話ではない。

私よりも圧倒的にイくのが遅くとも、性器を性器に包まれて扱き続けていけば、いつかは限界が近付くものだ。

カウルさんの腰振りは時間が経つほどに遠慮や容赦をかなぐり捨てたえげつないものに変わっていき、挿入から一時間が経った頃には——私の腰を両手でガツシリと掴んで前後に揺さぶり、全力で腰を振りたくるまでに至っていた。

「あ、はーっ♡きも、ち♡ああ、そろそろっ♡」

「ハーツ、ハーツ、ハツ」

ばちゅばちゅばちゅ♡高速ピストンのせいで、私の目の前

では星が散っていた。

散々揺さぶられ、犯された私はもう息も絶え絶えだ。

最早碌な反応も出来ずに、ただ膣穴で立派なおちんちんを扱き続けています。

硬くて、ずっしりと重たいカウルさんのつよつよおちんちんをだ。地獄のような訓練を日常的に行い体力をつけているのに、いきすぎたせいでもう、私はクタクタのへろへろ。

内側から際限なく襲い来る刺激というのはここまで体力を奪うのかと寧ろ関心までしている。

この思考が脳まで筋肉だと言われる所以かとも思ったが、深く達した瞬間に考えていたことは綺麗に吹っ飛んだ。

「ふっ、ふう！アーシャ♡くっ、アーシャ！」

「あえ、イグウ♡♡また、いぐ♡♡」

とにかくとにかく、私はもうへろへろの死にかけだ。

それなのにラストスパートだとばかりにガンガンと腰を叩き付けられ、のし掛かられて。汗の迸る体に覆われた私は、必死に酸素を取り込む口をも覆われた。

「ん、ちゅっ♡ふうっ♡んぢゅっ♡」

「んぐーっ！ンーツ！んんーっ！」

最後の力を振り絞って纏わり付いてくる唇を躲そうとするが、どうにも難しい。息がすごく、苦しくて――

「――♡♡♡」

そのせいで私はガクガクと全身を痙攣させ、特段深く達してしまった。やっぱり、苦しいは気持ちいい。苦しの、大好き……♡

「おっお……♡♡」

ガツガツと体を貪られながら、突き出した舌に歯を立てられる。

必死に酸素を取り込む中で舌にギリギリと歯を食い込まされて、
痛気持ちいい。

「ああへ……♡えへ……♡はへ♡♡」

朦朧とする意識の中で私はただ筋肉に押し潰され、舌や唇や鼻先に噛みつかれ、モンスターおちんぽによっておまんこの中を蹂躪されていた。

叩かれている肌がずっと乾いた音を立てている。きっと今は、根本まで挿っているのだ。だから肌と肌がぶつかっている。

長大なペニスを挟じ込まれたお腹の奥が、めちゃくちやに突き上げられていた。気持ちいい――

「あ、出る……ッ！」

「……あ」

吹き飛ばされそうな勢いのピストンに、私は気が付けば眼球を上

向けていた。

そうしてハッとした瞬間には、ズロツ！と抜かれた杭が、どっちゅんっ！と根本まで振じ込まれていて。数え切れないほどノックされた最奥の小さな口に、熱いものがかけられた。

「はっ、くう……！ハッ、ハッ♡」

「あ、あ、あ……」

気持ち良さそうに息を洩らすカウルさんは、私のこめかみに頬を擦り付けながら尚も腰を押し付けてきている。

ダクダクと胎内に注がれる灼熱。夥しい量を吐き出すおちんちんは、気持ち良さそうにフルフルと震えていた。

「あ、あ、イツく……♡♡」

何度もひしゃげて苛めぬかれた子宮にたっぷりと熱いものを注がれている。私はジンジンと広がる熱に、背中を反らした。

しかしガツチリと体を抱き込まれているせいで、動けたのはほんの僅かだった。

「っ、はー……っ♡全部、上手に飲めたな……♡」

「あ、ああ、おおお……♡」

未だ微塵も硬さが衰えない杭を根本までは咥え込んだまま。私はカウルさんの大きな手で、よしよしと頭を撫でられる。

「沢山イクイクできたなあ♡一体何回イッたんだ？ん？」

「うッ♡ウッ♡うっ♡」

限界まで振じ込んでおきながら、カウルさんは断続的に私へ腰を押し付けていた。僅かに押し潰された子宮からビュッ♡と精液が吐き出されるが、ピッタリと埋まった栓によって押し返される。

「あんなに一緒に良かったのに、結局バラバラだったな。」

……もう一回、チャレンジするか？」

「……あ、もう、いっかい……♡」

ぶちゅっ♡ぐちゅっ♡ごちゅっ♡

最深部に留まる杭が、ひたすらに行き止まりを押し上げている。

きつと、まだ足りないのだろう。

剛直は私の中で、物欲しそうに跳ねていた。

「まっ、て♡それえっ！」

「ふっ、ふうっ♡はあ、ふっ♡」

「……あゝおッ♡♡」

ゴリゴリと押し付けられている鼠径部のせいで、クリトリスまで押し潰されている。私はただただ身悶えて、快感が限界突破したせいで意味も分からずまた達する。

すると何だか楽しくなっちゃってしまい、ヘラリと笑った。

「それで、アーシャ。もう一回いいか？」

「もっ、か……♡♡」

甘えた声でそう問うてくるカウルさんに、私はゾクゾクとした興奮で震え上がる。

クタクタになっていて、数え切れないほど達した後でも。もっともっと手酷くいたぶってほしい。そう望んで私はしっかりと頷いた。

「ありがとう、アーシヤ♡」

——ずりゅっ！

「おっ、ほ♡♡♡」

すると即座に思いっきり、密着していた腰を引かれた。

愛液でドロドロになっている杭が、内壁をぼりゆりゆりゅ！ゾリリリッ！とめちやくちやに擦りながら抜けていく。

「……っふ！」

ズリユリユッ！——ばぢゅんっ！

「あゝあへっ♡♡♡おーっ!!」

強烈なひと突きをお見舞いされ——そして直ぐ様、嵐のように激しい律動が始まった。

ぼりゅぼりゅゾリユゾリユバツバツ。太い幹が膣壁をこそぎ、新しい愛液と漏れ出た精液を掻き混ぜ、泡立てていく。

一度出したカウルさんは、長持ち具合がより顕著になるようだ。

やがて擦られ過ぎた蜜道が白く泡立った体液でベタベタに濡れてそぼっても、彼の巧みな腰使いは止まらなかった。

それに対して私は、イキっぱなしだ。

潮やら尿やらを時折飛ばしながら、ずっとイッている。

だってイキ過ぎて苦しくて、苦しいから気持ちいいのだ。

気が付けば両足が勝手に彼の腰に絡み付いているし、腰だって自ら揺すっている。

お腹の奥がゴンゴンと叩かれてもひたすらに気持ちいい。

子宮なんてぺちゃんこにされていそうだが、そのおかげでイッている。だから、とことんいたぶってくれるおちんちんには、感謝しかなかった。

「アーシャ♡はあ、アーシャ！もつと、イッてくれ♡俺で、壊れるんだ……！」

「あへっ♡えへえっ♡おほ、お♡♡」

そうしてそれから更に二時間。

体力がやたらある魔術師と鍛えているはずがすぐにスタミナ切れとなった騎士は、長々とまぐわい続けた。

ここまでの長丁場となったのは『もう一回』という約束のはずがまた『もう一回』とねだられて。毎回被虐心を刺激された私が、素直に頷くせいであつた。